日本ロシア文学会
第 72 回大会資料集

2022 年 10 月 22（土）～10 月 23 日（日）
専修大学・ハイフレックス

日本ロシア文学会

【大会実行委員会からハイフレックス開催のお知らせとお願い】

今年度の大会は、対面とZoomによるオンラインを併せたハイフレックス方式で研究発表会を実施します。定例総会、理事会、各種委員会は対面のみで実施します。大賞受賞記念公演は対面で実施し、後日録画を公開します。懇親会は新型コロナウィルス感染症流行のため実施されません。

各会場の具体的な登録用のリンク等の詳細については、今後、日本ロシア文学会のホームページ（http://yaar.jpn.org/）と学会員メーリングリストによりご連絡いたします。今大会に関するその他の連絡も同様です。資料の配布はGoogle Driveからダウンロードする形で行います。

オンラインで研究発表会に出席されるに際しては、Zoom（遠隔会議システム）のダウンロード（最新版）と会場ごとの事前登録が必要となります。

専修大学会場への参加

会場は、専修大学神田キャンパス 10 号館（後の地図参照）です。受付は 9F ですが、人員は配置せず、受付の机に名札等を置いておきますので、各自お取りください。名札等を準備する都合上、事務局・大会実行委員会から 10 月初旬にお知らせする参加予定アンケートに、10 月 12 日（水）までにご回答くださるようお願いいたします。

オンラインでの大会参加の概要

同封の「第 72 回研究発表会（専修大学・ハイフレックス大会）Zoom の使い方」もお読みください。

1. 学会員メーリングリストで登録用 URL のお知らせメールを受け取ったら、参加希望の会場すべてに、10 月 21 日（金）までにご登録ください。同一時間帯の 3 会場に登録できます。
2. 事前登録制です。指定の URL にアクセスし、必要事項を記入してください。氏名の項目は指示に関係なく「先に姓、後に名前」を入力します。登録を終えると、改めてメールで当該会場の Zoom の URL（およびミーティング ID とパスコード）が送られてきます。
3. 当日、各会場は、開始 5 分前に開場します。Zoom の URL をクリックしてご参加ください。
4. 会場として、第 1 会場（A-I、A-III、A-IV、W-II）第 2 会場（A-II、C-II、A-V、W-III）第 3 会場（C-1、B-1、W-I）を設定します。
5. 開会式は 10 月 22 日（土）9:20 より第 1 会場で行います。
6. ハンドアウト（配布資料）は 10 月 20 日（木）以降に各自ダウンロードしてください。詳しくは、同封の「第 72 回研究発表会（専修大学・ハイフレックス大会）Zoom の使い方」をご覧ください。後日、学会員メーリングリストでもご連絡します。
7. 接続や資料のダウンロード等についてわからないことがあれば、10 月 20 日（木）までに、yaar.onlineteam@gmail.com までメールでお問い合わせください。10 月 21 日（金）以降は、メールを確認する担当者が不在となるため、対応できません。

メール受信確認のお願い

一斉メール配信システム（学会員メーリングリスト）に未登録、ないし現在使用しているアドレスを登録されていない方は、事務局（yaar@yaar.jpn.org）宛てに、現在のメールアドレスを至急ご連絡ください。

その他

各会場への登録用 URL は、学会員以外の学生や院生のみなさん、研究で関わりのある方々などにお知らせくださって結構です。

ただし、質疑の際の発言は、会員のみに限らせていただきます。また、SNS 等で無制限に拡散するのはおやめください。

☆お問い合わせ先

オンラインでの参加方法と資料については　　大会オンライン班　yaar.onlineteam@gmail.com
その他の問い合わせについては　　大会実行委員会　　exe_conf@yaar.jpn.org

第 72 回（2022 年度）定例総会・研究発表会は、来たる 10 月 22 日（土）、10 月 23 日（日）の両日、対面（専修大学神田キャンパス 10 号館）と Zoom によるオンラインを併せたハイフレックス方式で開催されます。

研究発表会では、17 件の個別発表（A, B, C）、3 件のワークショップ（W）が設けられます。ふるってご参加ください。

以下の日程をご確認の上、事務局・大会実行委員会から 10 月初旬にお知らせする参加予定アンケートに、10 月 12 日（水）までにご回答くださるようお願いいたします。

オンラインで参加を希望される場合は、学会ホームページの掲示と一斉メール配信システム（学会員メーリングリスト）による事務局、広報委員会、大会実行委員会オンライン班からの今後の連絡に基づき、10 月 21 日（金）までに、会場ごとの事前登録をお願いいたします。

日本ロシア文学会 2022 年度研究発表会・定例総会（専修大学・ハイフレックス大会）タイムテーブル

<table>
<tr><th colspan="5">10 月 22 日（土）</th></tr>
<tr><td colspan="5">開会式　09:20-09:30　第 1 会場（9F10091）</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>第 1 会場
（9F10091）</td><td>第 2 会場
（9F10092）</td><td>第 3 会場
（8F10081）</td></tr>
<tr><td rowspan="6">研究発表</td><td>09:35-10:10</td><td rowspan="3">ブロック①
A-Ⅰ</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>10:10-10:45</td><td rowspan="2">ブロック②
A-Ⅱ</td><td rowspan="2">ブロック③
C-Ⅰ</td></tr>
<tr><td>10:45-11:20</td></tr>
<tr><td>11:20-11:25</td><td colspan="3">休憩</td></tr>
<tr><td>11:25-12:00</td><td rowspan="2">ブロック④
A-Ⅲ</td><td rowspan="2">ブロック⑤
C-Ⅱ</td><td>ブロック⑥
B-Ⅰ</td></tr>
<tr><td>12:00-12:35</td><td></td></tr>
<tr><td>昼食</td><td>12:35-13:35</td><td colspan="3">昼食　理事会</td></tr>
<tr><td rowspan="4">研究発表</td><td>13:35-14:10</td><td rowspan="3">ブロック⑦
A-Ⅳ</td><td></td><td rowspan="4">ブロック⑨
W-Ⅰ</td></tr>
<tr><td>14:10-14:45</td><td rowspan="2">ブロック⑧
A-Ⅴ</td></tr>
<tr><td>14:45-15:20</td></tr>
<tr><td></td><td>15:20-15:35</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>休憩</td><td>15:35-15:45</td><td colspan="3">休憩</td></tr>
<tr><td>大賞受賞記念講演</td><td>15:45-16:45</td><td colspan="3">3F10031（黒門ホール）</td></tr>
<tr><td>定例総会</td><td>16:50-18:10</td><td colspan="3">3F10031（黒門ホール）</td></tr>
<tr><td colspan="5"></td></tr>
<tr><th colspan="5">10 月 23 日（日）</th></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>第 1 会場
（9F10091）</td><td>第 2 会場
（9F10092）</td><td>第 3 会場
（8F10081）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ワークショップ</td><td>09:30-11:30</td><td rowspan="2">ブロック⑩
W-Ⅱ</td><td>ブロック⑪
W-Ⅲ</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>11:30-12:30</td><td></td></tr>
<tr><td>昼食　各種委員会</td><td>12:30-13:30</td><td colspan="3"></td></tr>
</table>

会場案内〈受付〉10 号館 9F 〈控室・書籍等展示〉10 号館 8F10082

プレシンポジウム
日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会・合同公開シンポジウム（ハイフレックス形式）

ロシア・東欧の抵抗精神

―抑圧・弾圧の中での言葉と文化：ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、ポーランド、チェコ―

日時：2022 年 10 月 21 日（金）18:00～21:00
場所：専修大学神田キャンパス 10 号館 16 階相馬記念ホール

《趣旨》　2021 年ノーベル平和賞を受賞したことで世界的に知られるようになったロシアの独立系新聞『ノーヴァヤ・ガゼータ』の編集長ムラトフを始めとして、ロシアには権力からの抑圧・弾圧に屈することなく自由な言葉を発し、文化活動を展開する強固な伝統がある。ソ連時代に弾圧され国外追放になったノーベル賞作家ソルジェニーツィンしかり、反戦思想などのため政府に睨まれロシア正教会から破門されたトルストイしかり、自由思想の持ち主で流刑同然になったプーシキンしかり。一方、大国から軍事侵攻さえ受け、正常な生活と言論・文化活動を破壊された東欧諸国にも、強固な抵抗精神、抑圧と弾圧の中での自由な言論と文化活動の伝統がある。このようなロシア・東欧の抵抗精神に改めて光を当てて広く紹介することは、精神的な糧と力を提供する機会となろう。

司会： 小椋彩（北海道大学助教）

はじめに（趣旨説明）：石川達夫（専修大学教授・神戸大学名誉教授）

ロシア：前田和泉（東京外国語大学教授）
ベラルーシ：奈倉有里（早稲田大学非常勤講師・翻訳家・エッセイスト）
ウクライナ：中澤英彦（東京外国語大学名誉教授）

ポーランド：西成彦（立命館大学特任教授）
チェコ：石川達夫（専修大学教授・神戸大学名誉教授）

コメント・リアクション：貝澤哉（早稲田大学教授）、阿部賢一（東京大学准教授）

質疑応答・全体討論

協賛：専修大学人文科学研究所

・オンラインで視聴を希望する場合：
事前登録は不要です。YouTube の「日本ロシア文学会広報委員会」のチャンネル（https://www.youtube.com/watch?v=Dvm8b0n_-wQ）（下左の QR コードでも可能）で同時配信する予定です。後日、同じチャンネルのアーカイブで視聴することも可能です。
・会場での対面参加を希望する場合：
Google Form（https://forms.gle/La7tQKR7jCv12pa29）（下右の QR コードでも可能）での事前登録が必須です。先着順で受け付け、定員に達し次第、締め切ります。

・YouTube オンライン配信用チャンネルの QR コード

・対面参加事前申込用 Google Form の QR コード

第 1 日研究発表　10 月 22 日（土）

第1会場(9F10091)				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック① 10 月 22 日 9:35-11:20	A01	平嶌　寛大 ХИРАСИМА Кандай	Я. Б. クニャジニーンの喜劇『変人たち』における自由思想 Свободомыслие в комедии Я. Б. Княжнина «Чудаки»	鳥山祐介 飯田梅子
	A02	安島　里奈 АДЗИМА Рина	フョードル・ソログーブ『小悪魔』における芳香 Благоухание в романе «Мелкий бес» Ф. Сологуба	
	A03	中澤　佳陽子 НАКАДЗАВА Каёко	ツルゲーネフの『足れり』における時間的遠近法 Временная перспектива в рассказе «Довольно» И. С. Тургенева	
ブロック④ 10 月 22 日 11:25-12:35	A06	金丸　駿 КАНЭМАРУ Сюн	リアノゾヴォにおけるコンクリート・ポエトリー再考―イーゴリ・ホーリン『地球が死んだ』をめぐって Пересмотр конкретной поэзии в Лианозовской школе на примере «Умер Земной Шар» Игоря Холина	高柳聡子 武田昭文
	A07	プロホロワ・マリア ПРОХОРОВА Мария	リノール・ゴラーリクの戦争小説―非人間化と擬生物化を通して見えるもの― Военная проза Линор Горалик: на стыке расчеловечивания и одушевления	
ブロック⑦ 10 月 22 日 13:35-15:20	A08	小林　淳子 КОБАЯСИ Дзюнко	児童文学作家 S. マルシャーク再考 С. Маршак как основатель советской детской литературы	南平かおり 大森雅子
	A09	濱田　玲央 ХАМАДА Лео	ゴーリキー『チェルカッシ』の海を中心とした自然描写の研究 Анализ описания морской природы в рассказе Горького «Челкаш»	
	A10	田村　太 ТАМУРА Футоси	サヴィンコフ／ロープシンの初期創作を読む К характеристике раннего творчества Б. В. Савинкова-Ропшина	
第 2 会場(9F10092)				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック② 10 月 22 日 10:10-11:20	A04	李　博聞 ЛИ Бовэнь	初期パステルナークの創作における象徴主義的な側面：パステルナーク「二月」とアンネンスキー「黒い春」の比較研究 Символистский характер в творчестве раннего Пастернака (на материалах стихотворений «Февраль. Достать чернил и плакать!..» Б. Пастернака и «Черная весна» И. Анненского)	前田和泉 宇佐見森吉
	A05	沖　隼斗 ОКИ Хаято	ボリス・ポプラフスキイ「冬の日　動きのない空で…」をめぐって―雪の時空間と移動の問題 К вопросам хронотопа снега и передвижения лирического субъекта в стихотворении Б. Поплавского «В зимний день на небе неподвижном...»	
ブロック⑤ 10 月 22 日 11:25-12:35	C03	小川　佐和子 OGAWA Sawako	ロシア文学と新派映画―トルストイ『復活』の映画化を中心に Russian Literature and *Simpa* Films: Focusing on the Film Adaptation of Tolstoy's "Resurrection"	長谷川章 メーリニコワ
	C04	福間　加容 FUKUMA Kayo	映画「惑星ソラリス」(1972)の「他者」とクリスの再生について “Others” and Chris’ Rebirth in “Solaris” (1972) by Tarkovsky	

ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑧ 10 月 22 日 14:10-15:20	A11	大野　斉子 ОНО Токико	『ミルゴロド』におけるウクライナをめぐるゴーゴリの歴史認識 Тема Украины в «Миргороде» и историческое сознание Гоголя	伊東一郎 中村唯史
	A12	上村　正之 УЭМУРА Масаюки	『エネイーダ』から『タラス・ブーリバ』へ：詩学とナショナリズムの関係 От «Энеиды» к «Тарасу Бульбе»: связь поэтики с национализмом	
第 3 会場（8F10081）				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック③ 10 月 22 日 10:10-11:20	C01	岩原　宏子 ИВАХАРА Хироко	ロシア人形劇の歴史におけるペトルーシカ人形劇の役割―イワン・ザイツェフ、ニーナ・シモノービッチ=エフィーモワ、イワン・エフィーモフの活動を例に― Театр Петрушки в истории русского кукольного театра на примере деятельности И. А. Зайцева, Н. Я. Симонович-Ефимовой и И. С. Ефимова	楯岡求美 伊藤愉
	C02	横山　綾香 ЁКОЯМА Аяка	ユーリー・リュビーモフ演出『聞いてくれ！』(1967)における詩人の役割 Роль Поэта в постановке Юрия Любимова «Послушайте!» (1967)	
ブロック⑥ 10 月 22 日 11:25-12:00	B01	渡部　直也 ВАТАБЭ Наоя	ウクライナ語の母音高段化における数量的傾向 Количественные характеристики в чередовании между гласными [o, e] и [i] в украинском языке	古賀義顕
ブロック⑨ 10 月 22 日 13:35-15:35	W01	中堀　正洋 НАКАХОРИ Масахиро 熊野谷　葉子 КУМАНОЯ Ёко 柚木　かおり ЮНОКИ Каори ДОРОХОВА Екатерина (Москва, онлайн)	21 世紀のロシア・フォークロア Русский фольклор XXI века	柚木かおり （コーディネーター）他

第 8 回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10 月 22 日（土）15:45-16:45　10 号館 3F10031（黒門ホール）

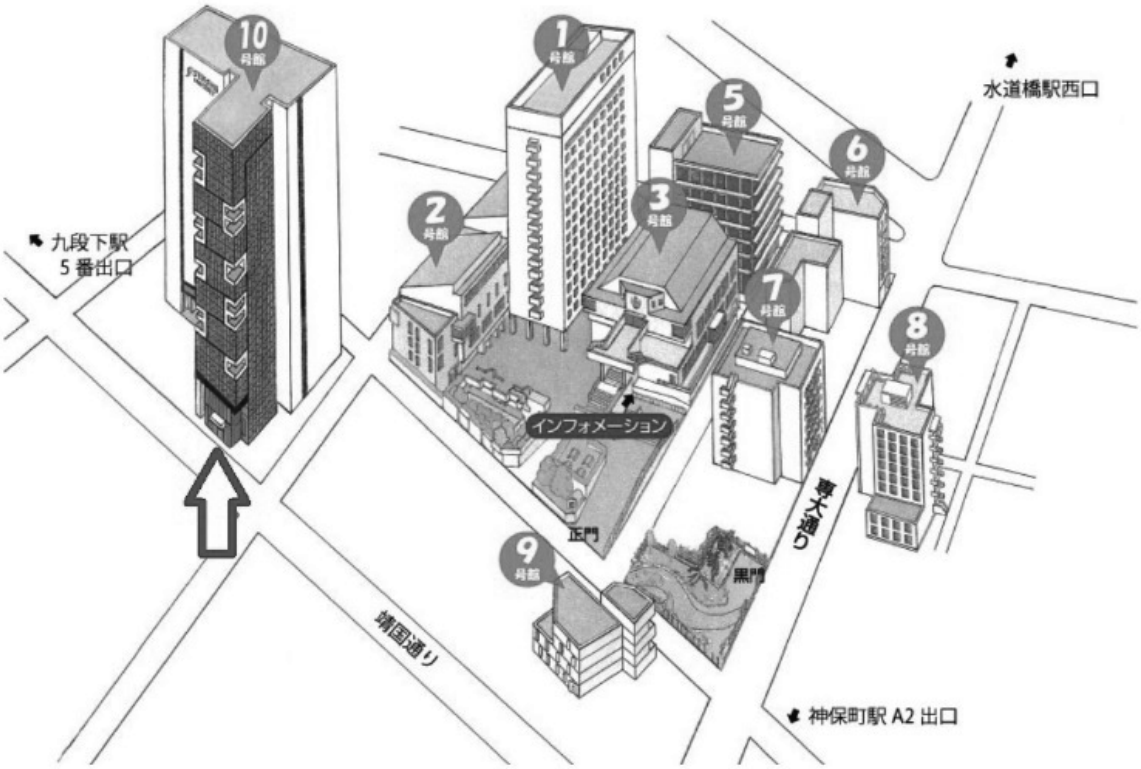
受賞講演者	講演題目
井上幸義（上智大学名誉教授） ИНОУЭ Юкиёси	ゴーゴリの鏡の世界 ―『鼻』の中の鏡像 Гоголевский зеркальный мир: зеркальное отражение в повести «Нос»

第 2 日研究発表　10 月 23 日（日）

第1会場（9F10091）				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑩ 10 月 23 日 09:30-12:30	W02	宮風　耕治 MIYAKAZE Koji 原田　義也 HARADA Yoshinari 大森　雅子 OMORI Masako 大野　斉子 ONO Tokiko （討論者） 沼野　恭子 NUMANO Kyoko 安達　大輔 ADACHI Daisuke	文学史から考えるウクライナとロシア Ukraine and Russia from a Perspective of Literary History	越野剛

第 2 会場（9F10092）				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑪ 10 月 23 日 9:30-11:30	W03	長與　進 НАГАЁ Сусуму 澤田　和彦 САВАДА Кадзухико 塚本　善也 ЦУКАМОТО Зэнъя 吉見　薫 ЙОСИМИ Каору	安井亮平＝ボリス・エゴーロフ往復書簡（1974-2018 年）について О переписке Р. Ясуи с Б. Ф. Егоровым (1974-2018)	澤田和彦（コーディネーター）

【会場案内】: 専修大学神田キャンパス 10 号館



・九段下駅（地下鉄／東西線、都営新宿線、半蔵門線）出口５より徒歩１分
・神保町駅（地下鉄／都営三田線、都営新宿線、半蔵門線）出口Ａ２より徒歩３分
・水道橋駅（JR）西口より徒歩７分

【宿泊・昼食その他】
・宿泊先は各自ご手配ください。
・食事場所は神保町駅周辺に多数あります。
・駐車場はありません。自家用車でのご来場はご遠慮ください。
・新型コロナウィルス感染症が終息していない限り、建物内ではマスクの着用が義務づけられていますので、各自必ずマスクをご持参ください。

【会場説明】
〈プレシンポジウム〉16F 相馬記念ホール
〈受付〉9F 廊下
〈控室・書籍等展示〉8F10082
〈発表会場〉　第 1 会場 9F10091：開会式、ブロック①、④、⑦、⑩
　　第 2 会場 9F10092：理事会、ブロック②、⑤、⑧、⑪
　　第 3 会場 8F10081： ブロック③、⑥、⑨
〈大賞受賞記念講演〉　3F10031（黒門ホール）
〈定例総会〉　3F10031（黒門ホール）

日本ロシア文学会第 72 回研究発表会
報告要旨集

A01　平嶌　寛大　Я. Б. クニャジニーンの喜劇『変人たち』における自由思想

A02　安島　里奈　フョードル・ソログープ『小悪魔』における芳香

A03　中澤　佳陽子 ツルゲーネフの『足れり』における時間的遠近法

A04　李　博聞　初期パステルナークの創作における象徴主義的な側面：パステルナーク「二月」とアンネンスキー「黒い春」の比較研究

A05　沖　隼斗　ボリス・ポプラフスキイ「冬の日　動きのない空で…」をめぐって――雪の時空間と移動の問題

A06　金丸　駿　リアノゾヴォにおけるコンクリート・ポエトリー再考―イーゴリ・ホーリン『地球が死んだ』をめぐって

A07　プロホロワ・マリア　リノール・ゴラーリクの戦争小説―非人間化と擬生物化を通して見えるもの―

A08　小林　淳子　児童文学作家 S. マルシャーク再考

A09　濱田　玲央　ゴーリキー『チェルカッシ』の海を中心とした自然描写の研究

A10　田村　太　サヴィンコフ／ロープシンの初期創作を読む

A11　大野　斉子　『ミルゴロド』におけるウクライナをめぐるゴーゴリの歴史認識

A12　上村　正之　『エネイーダ』から『タラス・ブーリバ』へ：詩学とナショナリズムの関係

B01　渡部　直也　ウクライナ語の母音高段化における数量的傾向

C01　岩原　宏子　ロシア人形劇の歴史におけるペトルーシカ人形劇の役割―イワン・ザイツェフ、ニーナ・シモノービッチ=エフィーモワ、イワン・エフィーモフの活動を例に―

C02　横山　綾香　ユーリー・リュビーモフ演出『聞いてくれ！』(1967)における詩人の役割

C03　小川　佐和子 ロシア文学と新派映画―トルストイ『復活』の映画化を中心に

C04　福間　加容　映画「惑星ソラリス」（1972）の「他者」とクリスの再生について

W01　21 世紀のロシア・フォークロア　（中堀 正洋、柚木 かおり、熊野谷 葉子、ДОРОХОВА Екатерина）

W02　文学史から考えるウクライナとロシア　（宮風 耕治、原田 義也、大森 雅子、大野 斉子 ／ 討論者　沼野 恭子、安達 大輔 ／ 司会　越野 剛）

W03　安井亮平＝ボリス・エゴーロフ往復書簡（1974-2018 年）について　（長與 進、澤田 和彦、塚本 善也、吉見 薫）

日本ロシア文学会

2022 年 10 月

Abstracts of Research Papers Accepted for the 72nd Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

A01	ХИРАСИМА Кандай	Свободомыслие в комедии Я. Б. Княжнина «Чудаки»
A02	АДЗИМА Рина	Благоухание в романе «Мелкий бес» Ф. Сологуба
A03	НАКАДЗАВА Каёко	Временная перспектива в рассказе «Довольно» И. С. Тургенева
A04	ЛИ Бовэнь	Символистский характер в творчестве раннего Пастернака (на материалах стихотворений «Февраль. Достать чернил и плакать!..» Б. Пастернака и «Черная весна» И. Анненского)
A05	ОКИ Хаято	К вопросам хронотопа снега и передвижения лирического субъекта в стихотворении Б. Поплавского «В зимний день на небе неподвижном...»
A06	КАНЭМАРУ Сюн	Пересмотр конкретной поэзии в Лианозовской школе на примере «Умер Земной Шар» Игоря Холина
A07	ПРОХОРОВА Мария	Военная проза Линор Горалик: на стыке расчеловечивания и одушевления
A08	КОБАЯСИ Дзюнко	С. Маршак как основатель советской детской литературы
A09	ХАМАДА Лео	Анализ описания морской природы в рассказе Горького «Челкаш»
A10	ТАМУРА Футоси	К характеристике раннего творчества Б. В. Савинкова-Ропшина
A11	ОНО Токико	Тема Украины в «Миргороде» и историческое сознание Гоголя
A12	УЭМУРА Масаюки	От «Энеиды» к «Тарасу Бульбе»: связь поэтики с национализмом
B01	ВАТАБЭ Наоя	Количественные характеристики в чередовании между гласными [о, е] и [і] в украинском языке
C01	ИВАХАРА Хироко	Театр Петрушки в истории русского кукольного театра на примере деятельности И. А. Зайцева, Н. Я. Симонович-Ефимовой и И. С. Ефимова
C02	ЁКОЯМА Аяка	Роль Поэта в постановке Юрия Любимова «Послушайте!» (1967)
C03	OGAWA Sawako	Russian Literature and Simpa Films: Focusing on the Film Adaptation of Tolstoy's "Resurrection"
C04	FUKUMA Kayo	“Others” and Chris’ Rebirth in “Solaris” (1972) by Tarkovsky
W01	Русский фольклор XXI века (НАКАХОРИ Масахиро, КУМАНОЯ Ёко, ЮНОКИ Каори, ДОРОХОВА Екатерина)	
W02	Ukraine and Russia from a Perspective of Literary History (MIYAKAZE Koji, HARADA Yoshinari, OMORI Masako, ONO Tokiko, NUMANO Kyoko, ADACHI Daisuke, KOSHINO Go)	
W03	О переписке Р. Ясуи с Б. Ф. Егоровым (1974–2018) (НАГАЁ Сусуму, САВАДА Кадзухико, ЦУКАМОТО Зэнъя, ЙОСИМИ Каору)	

JASRLL

October 2022

以下の研究報告要旨は著者に無断で
引用できない。
Not for quotation without the author's
agreement.

【A01】Я. Б. クニャジニーンの喜劇『変人たち』における自由思想

平嶌　寛大

Я. Б. クニャジニーンの喜劇『変人たち』は、フランス人劇作家フィリップ・ネリコー・デトゥーシュの喜劇『変人』の翻案だと言われている。確かに、『変人たち』における主人であるレンチャエフと下僕プロラスの会話は、『変人』の主人と召使の会話と同じである。しかし、この両喜劇の筋書きは、非常に大きく異なっている。

『変人』において、サンスペール伯爵は、偶然拾ったペンダントの持ち主である伯爵夫人に恋をするが、その変わった性格のゆえに、伯爵夫人と恋仲になるのに苦労することとなる。しかし、『変人たち』において、レンチャエフはすでに結婚しており、娘の結婚相手について妻と口論を繰り広げる。喜劇の展開・結末部分と、『変人たち』という題名から、この喜劇は A. П. スマローコフの喜劇『仲裁裁判』（のちに『ならず者たち』と改題）の模倣であることが推察できる。模倣を裏付ける点として、退役軍人の裁判官、詩人トロンペチンとスヴィレルキンといった登場人物が挙げられるだろう。

しかし、『仲裁裁判』の模倣としても、筋書きが異なっている。『仲裁裁判』では、夫婦の痴話喧嘩に対して裁判官たちによる形だけの仲裁裁判が開かれる。しかし、夫婦喧嘩に端を発し、婿候補が次々と登場しては門前払いされ、最終的に娘の恋が実る『変人たち』の筋書きは、むしろ同じくスマローコフの喜劇『トレソチニウス』に近い。

このように、『変人たち』は、『変人』から着想を、『仲裁裁判』から題名を、そして、『トレソチニウス』から構造をそれぞれ得たものであると言える。

主人と召使の平等を語るデトゥーシュの喜劇をクニャジニーンが借用したのは、П. Н. ベルコフが指摘しているように、悲劇『ノヴゴロドのヴァディム』で示したような自由思想を反映されていたためである。そして、スマローコフから喜劇の題名と構造を借用したのは、『《幸福な社会》の夢』『歪んだ世界へのもう一つの合唱』の中で、彼が理想の啓蒙国家を思い描いていたためであろう。

クニャジニーンは、スマローコフが理想としていた啓蒙国家を支持しつつ、自身の政治的意図と合致していたデトゥーシュの喜劇を導入として用いたのである。

（ひらしま　かんだい、神戸市外国語大学院生）

【A02】フョードル・ソログープ『小悪魔』における芳香

安島　里奈

フョードル・ソログープ（1863－1927）の『小悪魔』（1907）には、しばしば指摘されるように、二つの世界が対置されている。それは、ペレドーノフによる狂気と醜悪さに満ちた世界と、黒髪の美少年サーシャとリュドミラによる甘美な戯れの世界である。先行研究はペレドーノフ対サーシャという二項対立の構造をエウリピデスの『バッコスの信女』におけるペンテウス対ディオニュソスという対立構造に当てはめて分析するほか、ディオニュソス的歓喜を理解せぬペレドーノフに対抗する要素として、サーシャとリュドミラに見受けられるディオニュソス的なものを手がかりにこの小説を読み解く傾向にある。

しかし、より明確な対立構造の軸を成すのは、におい―悪臭と芳香―であろう。ペレドーノフは悪臭や不快なにおいを嗅ぐ。一方、リュドミラは香水の芳香を放ち、サーシャにも香水を振りかけ、その香りを嗅ぐ。また、ペレドーノフは教会の香や炉儀を嫌い、香水を嫌なにおいだと感じる人物であり、家の中には悪臭がこもっている。反対に、リュドミラは香水や香りの強い花、香を好み、部屋にはいつも何らかの芳香がたちこめている。

ソログープ自身がアンドレイ・ベールイに「香水嗅ぎ屋」と呼ばれたほどの香水愛好家であったそうだが、『小悪魔』には香りを放つ道具として、小説が書かれた当時のロシアで実際に流通していた香水が 10 種類ほど登場する。そして、においや嗅覚に関する豊富な描写の中でも、リュドミラが香水を使用する場面はとりわけ目を引く。リュドミラが振りまく香水は、嗅覚を刺激するだけではなく、視覚や触覚に訴え、特定の状況を作り出すこともある。また、リュドミラがサーシャに「ルサールカ」と呼ばれ、「異教徒」で「罪深い女」を自称し、裸体を愛す人物でもあることは興味深い。リュドミラに属する異教、裸体といったモチーフに注目すると、ソログープのエッセイ「画布と身体」（1905）と「スチヒーヤの敵意と好意」（1905）において述べられたようなソログープが理想とする身体のあり方や、スチヒーヤないし自然の称揚が表れていることがうかがえるのだ。

本報告では、『小悪魔』において香水がどのような効果をもたらすのかを検討し、さらに、香水を使用する登場人物であるリュドミラに与えられた役割も考察することにより、この小説における芳香が持つ意義を示したい。

（あじま　りな、東京外国語大学院生）

【A03】ツルゲーネフの『足れり』における時間的遠近法

中澤　佳陽子

ツルゲーネフは 19 世紀リアリズム期を代表する作品を発表する傍ら、ロマン主義的色彩の強い作品を書き続けた。そのうちの一つ『足れり（Довольно）』（1865）は、当時の作品としては構成が異色である。「亡くなった画家の手記の断片」という体裁をとっており、前半は語り手の記憶の中の幾つかの情景が断片的に描写される。後半は哲学的な思索が語られる。従来の研究では、ツルゲーネフが当時ショーペンハウアーの強い影響を受けていたことを示す論証としてこの作品の後半部分が引用されてきた。しかし文学作品としてその構成や手法を論じた研究はほとんどない。

発表当時この作品は評価されなかったが、現在の観点からすれば、この作品の構成は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての文学の傾向を先取りするものとして興味深い。すなわち、全知の視点から個人の運命を描くのではなく、個人の意識に反映した世界を断片的に描写するという傾向である。

論者は、ツルゲーネフに根強く残っていたロマン主義的傾向に前述のショーペンハウアー哲学の影響が「接ぎ木」されてこのような作品が書かれたと考える。ある研究者はツルゲーネフとショーペンハウアーの立場の近さを論じる際に、両者が政治・歴史と芸術を切り離したこと、そして両者にある種の無時間性への志向が見られることを指摘している。『足れり』においては、芸術家が自らの個性を表現しながらも「永遠」を志向することが述べられているが、この主張にはショーペンハウアーの芸術論との親近性が感じられる。

本発表では『足れり』の前半の回想部分を分析し、ツルゲーネフがどのように人間の個人的な感情を扱いながらも普遍的なものに迫ろうとしたかを明らかにする。『足れり』において記憶を扱ったのは、時間をおいて過去を顧みることによって描く対象から距離を置き、対象を客観的に描くという目的からであったように思われる。その際に、語り手の意識の中の複数の時間層を描き、かつそれらの時間層を互いに対峙させることによって、語り手の意識の変化を示している。また、それぞれの時間層に共通するモチーフを配置し、それらの記憶が個別的なものでありながらも恒常性があることを示している。このような手法は文学研究者アウエルバッハがその著『ミメーシス』において「時間的遠近法」と呼び、20 世紀の作家プルーストの作品にみられるとしたものである。

（なかざわ　かよこ、東京理科大学非常勤講師）

【A04】初期パステルナークの創作における象徴主義的な側面：パステルナーク「二月」とアンネンスキー「黒い春」の比較研究

李　博聞

本発表は、ボリス・パステルナーク初期の代表的な詩「二月 Февраль」（1912）を取り上げ、象徴主義詩人イノケンティー・アンネンスキーの「黒い春 Черная Весна」（1906）との比較分析により、両者の間テキスト性を示すことを通じて、その中の象徴主義的な側面を明らかにし、パステルナーク初期の詩作品の文学史的な位置付けを再考することを目指す。

「二月」は、パステルナークによって詩集『バリエール越え』の第 1 編に選ばれ、詩人みずから「初期の最高傑作」とも評価しているため、彼の初期の詩学と思想を考えるうえで特に重要な作品と判断できる。

「二月」は、パステルナークの友人であり、文学史研究者でもあったコンスタンティン・ロックスによって、アンネンスキーの「黒い春」との類似性が指摘されており、この類似性は後に詩人自身にも認められている。そしてこの詩には、創作年代によって主に三つの版本があり、それらのテキストの変遷には「黒い春」との関連がしだいに強くなっていった過程を見出すことができる。以上のことから、本発表は「二月」と「黒い春」の比較分析を軸とする。

発表は大きく三部から構成される。まず、「二月」の成立史における「黒い春」とのつながりがわかる資料（書簡、回想録、献辞など）を分析し、二つの詩のテキストにおける文学史的関連を推定する。次に、数度の修正を経て至った 1928 年版のテキストを主な対象として、他の版本を参照しつつ、そこに内包される「黒い」と「春」の隠喩、視線と事物の移動の過程に表れている方向性を整理し、パステルナークの構想する詩人像を明らかにする。そして、「黒い春」のテキストを参照しつつ、隠喩の使用、視線等の時空間的移動の点について比較分析を行う。最後に、上記の比較分析の結果をまとめた上で、パステルナーク初期の詩における象徴主義に対する認識を、アンネンスキー、ベールイなど象徴主義者の詩学論の比較において考察する。以上の過程によって、パステルナーク初期の詩における象徴主義的な側面の様相を明らかにし、未来主義に入る前夜に象徴主義運動の後継者として詩を書いていたパステルナークが思い描いていた詩人像を具体的に示すことができるだろう。

（り　はくぶん、京都大学院生）

【A05】ボリス・ポプラフスキイ「冬の日　動きのない空で…」をめぐって――雪の時空間と移動の問題

沖　隼斗

本発表の目的は、詩人ボリス・ポプラフスキイ（1903–1935）の詩篇「冬の日に　動きのない空で…」（1931）の読解である。またこの読解により、雪により現出する時空間及び眠りのモチーフが抒情的主体の移動の問題と密接に結びついていること、それによって展開される詩人の詩学の一端を明らかにすることである。

初出時「雪の時 Снежный час」と題されていたこの詩篇は詩集『雪の時』に収録される際に題名が削られ、詩集と同名の詩篇でなくなりはしたものの、詩集中唯一本文内に「雪の時」という言葉が使われていることを考慮すれば、この詩篇がなんらかの意味で詩集全体を読み解くための指標になるかと思われる。なぜならこの詩篇において「雪の時」とは、雪が降っている時間を表す言葉としてではなく、執筆＝詩作のための時空間に関わる言葉として用いられているからである。雪は昼の日常的な空間を夜の非日常的な空間に反転させる機能を担っており、それにより生の時空間を死の時空間に反転させているのである。1920 年代の詩論において生の空間として表されていた「園」の形象が、この詩篇では雪に降り込められ、死に絶えた「白い園」として変奏されていることからもそれは読み取れることができる。

しかし、この詩篇はそのような執筆の時空間の現出を描写するだけでなく、むしろその時空間で抒情的主体「おれたち мы」がいかなる主体として存在し得るかを問題にしている。動詞不定形の列挙により定言的命令を自らに課すこの抒情的主体の行為はすべて、非移動に関わるものであるが（「眠ること」「寝ること」など）、しかしそのような主体の「弱さ」ゆえに、眠りを介してむしろ移動が可能になるという逆転現象を読み取ることができる。この抒情的主体の受動性こそが、霊感＝冷感を吹き込まれる契機となるのであり、移動せぬままの移動を可能にしている。

そしてこの移動は、屋内から屋外＝都市を通過せずに眠りを媒介にして屋外＝草原に出ることであり、またこの移動には必ず他者が伴っている（この詩篇で抒情的主体は「おれたち」であり単数の主体ではない）。ここにもまたポプラフスキイの言語観の一端が現れていると思われる。雪による執筆の時空間を背景に、移動せぬままの移動を眠りにより、他者とともに達成することは、詩集『雪の時』を貫通する抒情的主体の「弱さ」とともに 1930 年代のポプラフスキイの詩的位置を明瞭に語っているのである。

（おき　はやと、早稲田大学院生）

【A06】リアノゾヴォにおけるコンクリート・ポエトリー再考--イーゴリ・ホーリン『地球が死んだ』をめぐって

金丸　駿

本発表の目的は、1950 年代中葉にドイツで興ったコンクリート・ポエトリーの詩学と 1960-70 年代のソヴィエトのアンダーグラウンド詩人、とりわけリアノゾヴォの詩人たちが有していたコンクリート・ポエトリー理解とのあいだに認められる、概念理解の齟齬と問題意識の差異を指摘することであり、またそれによって、ドイツを含めた西欧のコンクリート・ポエトリー理解によっては十全に説明することのできない、リアノゾヴォの詩人たちの詩篇を読解・検討することにある。ここでは、イーゴリ・ホーリンの詩篇の読解を中心に、その考察は進められる。

オイゲン・ゴムリンガーやフランツ・モンに代表される 50 年代ドイツのコンクリート・ポエトリーとは、言葉の具体性・素材性や言語的素材の構成・配置を重視した詩的実験の運動であり、言語中心主義をその特徴としていた。その背景には、第二次世界大戦により荒廃したドイツ語とドイツ文化総体に対する深い違和と問題意識が認められる。

コンクリート・ポエトリーがソヴィエトにはじめて紹介されたのは、1964 年に雑誌『外国文学』の第 7 号に掲載されたエフゲニイ・ゴロヴィンの記事「抒情詩 ≪モダン≫ Лирика «модерн»」においてであった。その後、70 年代初頭にリアノゾヴォの詩人たちを中心として「グループ・コンクレート」が結成される。その綱領は発起人であったエドゥアルド・リモーノフによって書かれ、77 年にパリで出版された文集『アボロン 77』に掲載されることになる。そこにおいてリモーノフは、「コンクリート」という概念をソヴィエトにおける生の「具体性」として解釈し、俗語や新聞の語彙、官僚言葉の使用・引用によって、ソヴィエトの現実を描写することにその詩学の意義を認めている。リモーノフの場合、コンクリート・ポエトリーは言語の問題ではなく、対象および素材の問題として認識されており、したがって、ここにおいてグループ・コンクレートの独特の「コンクリート」理解を指摘することができる。

しかし、グループ・コンクレートに名を連ねる詩人たちのあいだにもまた概念理解の齟齬が認められる。相互の「コンクリート」のずれを正確に理解することは、彼らの詩篇における問題意識と言語観の如何を把握するうえで必要不可欠となる。ここでは、ホーリンの 60 年代後半の長詩『地球が死んだ』などの読解を通じて、そこにホーリン独自のコンクリート・ポエトリー理解の現れを指摘したい。

（かねまる　しゅん、早稲田大学院生）

【A07】リノール・ゴラーリクの戦争小説—非人間化と擬生物化を通して見えるもの—

プロホロワ・マリア

歴史的記憶の研究者 N. エップレーによれば、2010 年代半ば以降のロシアでは、過去、特にスターリン時代の記憶が甦り、その見直しが強烈に求められるという「記憶の炎症」が起きているそうだ。文学でも、新たな観点および手法を取り入れて、大祖国戦争や強制収容所といった題材に取り組む作家が多くなっている。現代ロシアの作家は何を求めて、そうした苦しい過去に目を向けてきたのか。今回の発表では、リノール・ゴラーリク（1975 年生まれ）の近年の作品を取り上げ、大祖国戦争を描く手法の新しさとその意義について論じたい。

ゴラーリクは戦争に関わる詩も多数書いているが、今回の発表では散文に焦点を当て、彼女の代表的な戦争小説である 2020 年の『モイラ・モールタは死んでいる』（Мойра Морта мертва）および 2021 年の『N 氏記念病院』（Имени такого-то）を主な対象とする。前者は、包囲戦中のレニングラードと思われる街に、市民の命の長さを決めるギリシャ神話の「運命の三女神」（モイラ）が住んでいるという設定だが、事情により人間の男にその作業に加わってもらうことになり、不自然な役を与えられた彼の苦渋などが描かれている。なお、後者は、ドイツ軍が迫ってきている中、モスクワから艀船で避難した精神病院の実話に基づくファンタジーで、二つ頭の子猫、片脚が狼脚の男、自分の意思で動ける艀船といった不思議な表象が文中に散りばめられている。

両方の作品とも、歴史の反映として捉えられる描写がシュールな設定と複雑に交錯しており、戦争、特に大祖国戦争を題材とした従来のロシア文学とは一線を画している。ファンタジー要素の使用により、戦争そのものの非現実的な異常さを強調する効果がもたらされる。また、ゴラーリクが選ぶファンタジー要素の多くが人間の「非人間化」あるいは無生物や抽象的概念の「擬生物化」と関連がある点も興味深い。非人間的な状況に置かれた登場人物は、次第に人間性を失っていくと同時に、どうにかしてその人間性をつなぎとめようとしている状態である。この二つの相反する過程に沿って、彼らの現実もゆがめられ、鮮明に視覚化された内面の戦いが物語の中心に据えられる。こうしたメカニズムの分析を通して、戦争、それから人間性に対するゴラーリクの眼差しを明らかにし、現代ロシア文学における過去の捉え方についても考察の方向性を示したい。

（ぷろほろわ　まりあ、東京外国語大学院生）

【A08】児童文学作家 S. マルシャーク再考

小林　淳子

S. マルシャークは旧ソ連を代表する児童文学作家であり、現代ロシアでもその作品は変わらず読みつがれている。日本国内では「森は生きている」の作者として知られているが、体系的なマルシャーク研究は多くはない。マルシャークの事績をたどると以下の 6 つの特徴が浮かび上がるといえるだろう。1. 多分野にわたる活動（散文、詩、戯曲、翻訳、編集等）　2. 傑作絵本の創出（特に画家 V. レーベジェフとは「黄金コンビ」と呼ばれた）　3. 改訂の頻発（マルシャーク全集〈全 8 巻、1968 年-1972 年、ロシア語版〉には「全てのヴァリエーションを掲載するのは不可能なため、初版年を明記した上、生前の最新版を掲載する」とある）　4. 無国籍なフォークロア性（英語詩をはじめ、数多くの国の詩を翻訳）　5. ユダヤ出自　6. ソ連児童文学の確立に貢献

本発表では、まずこの 6 つの特徴を概観することで児童文学作家・マルシャーク像を包括的に捉える。その上で特に「6. ソ連児童文学の確立に貢献」という面に着目し、その側面における具体的な活動や業績などについて分析する。マルシャークが本格的に児童文学作家としての活動を開始したのは 1922 年だが、同年末にソビエト連邦が誕生すると、児童文学には「将来の社会主義国家を背負う子供たちの教育」という任務が課せられた。児童書は、低い識字率の解消のため、また字を覚える過程で子供たちに対して社会主義教育を行うための「強力な手段」となった。そうした状況の中、マルシャークは、1930 年代からは国立児童文学出版所の編集長を務めるなど、作家としてだけでなくオーガナイザーの一人としてソ連児童文学を牽引するようになる。また 1934 年、第 1 回全ソ連作家大会が開催された際、社会主義リアリズムの父と称される M. ゴーリキーに続き登壇したマルシャークは「小さな人のための大きな文学」と題した講演を行い、児童文学の重要性を訴えている。また、その生涯においてレーニン賞を 2 回、スターリン賞を 4 回受賞していることからも、マルシャークが社会主義体制のソ連において非常に成功した作家だということがわかる。ソ連という枠組みの中での「新しい」児童文学の基盤構築を行い、且つ自身の地位を確立したマルシャークの足跡を確認する。

（こばやし　じゅんこ、東京外国語大学院生）

【A09】ゴーリキー『チェルカッシ』の海を中心とした自然描写の研究

濱田　玲央

本発表では 1896 年に発表されたゴーリキーの短編作品『チェルカッシ』における自然描写が果たす機能と登場人物に与える印象、その象徴的な役割に関する研究成果について報告する。

『チェルカッシ』は、港町が舞台であり、浮浪者チェルカッシと出稼ぎ農民のガヴリーラが、夜中にボートに乗って沖合に停泊中の船へ泥棒に向かうという物語の展開上、非常に多くの自然描写が見受けられる。ただし、街や酒場が舞台となる時には自然描写は殆ど見られない事から、主人公たちが海やその近辺にいるという状況が、多くの自然描写が表れる条件なのである。

特に作中で自然描写が多いのは、泥棒に向かう夜である。泥棒の最中は静寂の海の不気味さや巨大な雲の圧迫感が、怯えるガヴリーラの目を通して強調される。一方で泥棒を成功裏に終えた後は、緊張からの解放感と共に海の静寂感も破れて明るくなっていく様子が描写される。これは２人の会話が弾んでいく事と対応し、その一因となっている。

作中で描写される海に対する２人の印象は大きく異なっており、両者の立場の違いを明確にする役割を果たしている。農民のガヴリーラにとって海は常に不気味であり、不安な気持ちにさせられるもので、大地を再び踏んだ時には安心感を覚える。

一方でチェルカッシには海は自由の象徴であり、生活の苦しさを忘れさせてくれる好ましいものであった。大地と結びつく農民のガヴリーラに対置される形で、大地を離れて海と結びつく浮浪者のチェルカッシが存在している。しかし、チェルカッシはガヴリーラに影響されて、自分の農民時代を回想すると、好きな海に出ているのにも関わらず孤独と心細さを感じる。この海を巡るチェルカッシの変化は、過去に捨てた軽蔑している筈の農民の生活に心が突き動かされる様子とガヴリーラと同じような農民意識への回帰を象徴するものである。チェルカッシの容姿の険しさが消える様子に加え、雨や波の描写とチェルカッシ自身の悲しげな印象は、農民への回帰を裏付けるものである。

このように『チェルカッシ』における自然描写は、単に物語の背景や状況を説明するだけの役割には留まらない。主人公たちの会話や行動に直接的な影響や象徴的な効果を及ぼす。そして、特に海の描写とそれに対する主人公たちの印象は、港町の浮浪者と農民の差異を浮き彫りにする役割を果たしている。

（はまだ　れお、東京大学院生）

【A10】サヴィンコフ／ロープシンの初期創作を読む

田村　太

本発表者は、十月革命前のロシア帝国における革命運動のテロリズムと同時代の文学潮流との関係について、革命家・作家のボリス・サヴィンコフ (1879-1925) を中心に研究を行なっている。これまでサヴィンコフが 1909 年に公表した小説『蒼ざめた馬』をめぐって、文化史的な考察も含めた研究を行なってきた。本発表の狙いは、考察の範囲をサヴィンコフがロープシン名義で活動する以前の時期に限定して、ほとんど顧みられてこなかった初期の創作を検討することである。

既存の研究はロープシン名義で公表されたサヴィンコフの作品に分析を集中させてきた。すなわち、1907 年に社会革命党（エスエル）戦闘団の活動から離脱した後、亡命先のパリでメレシコフスキー・サークルに接近した時期以降の作品である。研究者はこういった文化コンテクストを跡付けながら、サヴィンコフの代表作を分析する傾向にある。しかし、その反面、サヴィンコフがメレシコフスキーやギッピウスと接触する以前にどのような文学作品を書いていたのかについては、不明な点が多い。先行研究において、初期の創作は一挿話として触れられている程度であり、具体的なテクスト分析に基づいた議論がなされてきたとは言い難い。

そこで本発表では、サヴィンコフがエスエル戦闘団のテロリズム活動に関与する以前の 1900-1903 年代に注目する。この時期はサヴィンコフが、マルクス主義系の政治運動からナロードニキ系のテロリズム活動へ移行していく期間であり、その過程でいくつかの政治的論考や小説が公表されている。本発表では『死者たちの影に』(1902) や『たそがれのなかで：素描』(1903) といった小説テクストをおもに扱うが、政治的論考「ペテルブルグの運動と社会民主派の実践的諸課題」(1901) も参照する。これらのテクストに基づいて、その後のサヴィンコフ作品において繰り返し描かれた死や暴力といったモチーフが、初期の創作ではどのように表象されているかを明らかにすると同時に、〈テロル〉へと傾倒していく世紀転換期の革命家の世界観について文化史的な考察を加えたい。

（たむら　ふとし、京都大学院生）

【A11】『ミルゴロド』におけるウクライナをめぐるゴーゴリの歴史認識

大野　斉子

本報告は、ニコライ・ゴーゴリの作品集『ミルゴロド』を通じてゴーゴリが提示したウクライナの表象から当時におけるゴーゴリの歴史認識およびそれに根差したウクライナ観を読み取るものである。

ウクライナ出身であるゴーゴリのアイデンティティは、現在、その境界性・多層性に着目する研究によって再考に付されている。それらの研究ではウクライナ出身の知識人の境界性が社会的側面から自己意識のレベルまで多角的に掘り起こされると同時に、境界性が何を生み出したかという観点から文学研究が行われている。

本報告ではまず、上記の研究の枠組みを援用しながら、『ミルゴロド』に描かれるウクライナを構築するゴーゴリの歴史認識やウクライナ内部における複数の立場などを取り出し、この作品集の同時代的性格について考察する。特に注目されるのはテキストに反映しているゴーゴリおよびウクライナの知識人に共有された歴史観である。『ミルゴロド』の執筆時期はゴーゴリがウクライナ史に目を向けた時だけでなく、ウクライナ知識人たちのロシア・ウクライナ関係に対する意識の高まりとも重なっていることから、同時代の背景を含めて検討を行う。

また、『ミルゴロド』に描きこまれる歴史的モチーフを歴史的事件や登場人物のアトリビュート等が指し示す文化的コンテクストから分析し、当時のウクライナ内部で読み取られたであろう『ミルゴロド』がどれほどロシアの読者と異なる様相を呈していたかについて推論をおこなう。さらに、『ミルゴロド』の作品はそれぞれにロシア・ウクライナ関係をめぐるゴーゴリの折衷的立場を表していることから、同時代のウクライナ知識人との比較を通じ、ゴーゴリの同化志向がどのように現れているのかについても検討を行いたい。

以上をつうじて、『ミルゴロド』を執筆したゴーゴリのウクライナへの眼差しの一端を明らかにするとともに、『ミルゴロド』が生み出したウクライナ像の特徴について考察する。

（おおの　ときこ、宇都宮大学）

【A12】『エネイーダ』から『タラス・ブーリバ』へ：詩学とナショナリズムの関係

上村　正之

ゴーゴリの『タラス・ブーリバ』（1835、1842）のコサック像においては、バフチンのカーニヴァル的な「低位」の表象と、理想化された過去の時代の英雄的行為といった「高位」の表象が混交している。

本報告ではこの詩学を先取りする作品として、イヴァン・コトリャレフスキー（1769-1838）の『エネイーダ』（1798～）に注目する。『タラス・ブーリバ』に関する先行研究では、ゴーゴリ以前の「ウクライナもの」の散文作品や、同時代の歴史小説と比較した際、形象やプロットの独自性を強調する傾向があった。しかし、「低位」に「高位」の表象を交錯させてコサックを描く詩学の原型は、『エネイーダ』に求めることができる。『エネイーダ』は古典主義のジャンル規範では「パロディ叙事詩」に属し、ウェルギリスウスの『アエネーイス』に登場する古典古代の英雄・神々が、ザポロージェ・コサックやウクライナの日常的な事物・形象に置き換えられている。戯画化の素材にされているとはいえ、コサックは依然として英雄であり、原作の筋をなぞり、神から与えられた使命を果たす。

後半では、『エネイーダ』と『タラス・ブーリバ』を分かつ特徴として、ナショナリズムの問題を取り上げる。『エネイーダ』はウクライナ語で書かれ、さらに 18 世紀後半まで存在したヘトマン国家に対する郷愁の念を表明し、民族・文化の独自の価値を訴えるが、コサックの自己同一性を脅かす「他者」の存在は稀薄である。他方、ゴーゴリは 17 世紀頃のウクライナ／ポーランドの戦争を材にとり、これを宗教・民族戦争として捉える。筋の進展とともに、憎しみや被害者意識が戦争の原動力になっていく。主人公タラス・ブーリバは、コサックの中にあって特異な存在で、自覚的な民族意識と民族的記憶を持っている。この点について、主に 1842 年版第 9 章におけるタラスの演説場面から読み取る。暴力描写自体は、当時の歴史小説では珍しいものではないが、民衆による暴力をナショナリズムの論理で正当化するレトリックは注目に値する。「高位」と「低位」のグロテスクな共存は、ときに過激さを帯びるナショナリズムの言語によってなされているのである。

（うえむら　まさゆき、北海道大学院生）

【B01】ウクライナ語の母音高段化における数量的傾向

渡部　直也

ウクライナ語では開音節の[o, e]が閉音節で[i]に交替するが（роки～рік など）、交替しない例も多い（народ など）。本研究はその数量的傾向を調査した。対象は辞書形が子音で終わる名詞で、オンライン辞典（http://slovnyk.ua/）からデータを収集し、派生語を除外するため、2 音節以下の語のみに絞った。また、当該母音を含む接尾辞（-ок, -ець, -ість など）で終わる語は除外し、Мельничук (1974)の外来語辞典を参考に外来語も除いた。さらに、出没母音は原則として上述の交替が生じないことがわかったため、除外した。

ここで、語の使用頻度が非常に低いものを除外するため、キーウ国立大学計算言語学研究室の作成するコーパスにおける「公刊物」の項目（http://www.mova.info/cfq1.aspx?fdid=publ2018）から、上位 1 万語の名詞を収集し、それに含まれる 357 語を対象とした。

結果を図 1 に示す。全体として、頻度の高い語では交替が生じやすいことがわかった。表 1 に示すように、上位 2,000 語では 6 割強で交替が生じており、その他の語との間で有意差が見られた（$\chi 2 = 6.3892$, df = 1, p = .01148）。

本調査の結果から、全体的な言語使用の中で交替が生じる確率が高いことが数量的に示された。一方で頻度の低い語においては、元の語形を保持する制約が働いていると考えられる。これは特に外来語に関する研究（e.g. Ito & Mester 1999）で指摘されてきたことと類似しており、馴染み度の低い語を認識しやすくするためであると言える。

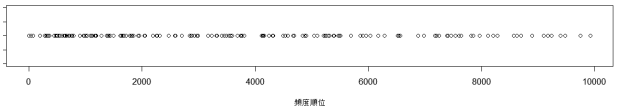


図1：交替の生じる語とその使用頻度

	上位 2,000 語	その他	合計
交替あり	55 (60.4%)	118 (44.4%)	173 (48.5%)
交替なし	36	148	184
合計	91	266	357

表 1 ：頻度と交替の関係

参考資料

Ito, J. & Mester, A. The Phonological Lexicon. Tsujimura, N. (ed.) The Handbook of Japanese Linguistics, 62–100. Oxford: Blackwell, 1999.

Мельничук, О. С. Словарь иноязычных слов. К., 1974.

（わたべ　なおや、東京大学）

【C01】ロシア人形劇の歴史におけるペトルーシカ人形劇の役割―イワン・ザイツェフ、ニーナ・シモノービッチ=エフィーモワ、イワン・エフィーモフの活動を例に―

岩原　宏子

ロシアの民衆人形劇ペトルーシカは、定期市見世物小屋や街頭で演じられ、大衆のための人形芝居として、19 世紀から 20 世紀の初頭に人気を博した。主人公であるペトルーシカは、赤いルパシカを着て、房のついた帽子をかぶり、鳥の嘴のようなとがった鼻の姿で知られており、独特の声を出す。

ペトルーシカは、ロシア革命直後のアジプロ演劇で宣伝ポスター用の劇のように利用されたこともあったが、1930 年代には本来のペトルーシカ劇はほとんど姿を消した。現在では、ペトルーシカを演じている劇団や個人はわずかである。

16 世紀から 19 世紀にかけてヨーロッパ各地でペトルーシカの「兄弟」とも呼べる人形が活躍した（イギリスのパンチなどが代表的である）。これら民衆人形劇の主人公たちは、笑いと風刺性に富み、権力からの圧力を跳ね飛ばす強力なエネルギーを持っていたことで共通していた。

本報告では、ロシアのペトルーシカの特徴を説明し、その後、元々サーカスの芸人で、伝統的なペトルーシカを生涯守り続け、「最後のペトルーシカ人形使い」と呼ばれたイワン・ザイツェフ（1863～1936）の活動を紹介する。さらに、ロシアにおける職業的な人形劇の創始者といわれるニーナ・シモノービッチ=エフィーモワ（1877～1948）と彼女の夫、イワン・エフィーモフ(1879～1959)が、ペトルーシカのイメージをどのように進化させてきたのかについて、エフィーモワの代表的著作『ペトルーシカ人形劇役者の手記と人形劇に関する論文』（Л.,Искусство,1980）を中心に論じる。

モスクワの中央人形劇場にはイワン・ザイツェフやエフィーモフ夫妻の資料が残されており、それらをもとにロシアのペトルーシカを考察したい。また、報告では、今まであまり考察されてこなかった、手使い人形劇の手法、操作方法からみたペトルーシカについても触れたい。

（いわはら　ひろこ、東海大学非常勤講師）

【C02】ユーリー・リュビーモフ演出『聞いてくれ！』(1967)における詩人の役割

横山　綾香

演出家ユーリー・リュビーモフ（1917～2014）は、1964 年にモスクワ・タガンカ劇場の芸術監督に就任して以来、歌の挿入や簡素な舞台美術・衣装など前衛的な演出手法で、ソ連批判の意味合いも含んだ挑戦的でダイナミックな演劇作品を次々と送りだした。

当時プロパガンダ的ではない視点でソ連社会を描いた戯曲はすでに存在したが、タガンカ劇場のレパートリーの多くは過去の文学作品をリュビーモフ本人が脚色した演目であった。権力批判の意図を持った作品も後に登場するが、当初はロシア革命や大祖国戦争の体験に基づいた文学を舞台化していた。その狙いは政府によって歪めて語られている歴史の本来の姿を浮かび上がらせることであった。

このような過去の再現を試みる演目では、散文よりもロシアの詩が題材として取り上げられた。俳優が実在の詩人を演じ、本人として詩や書簡・手記などを朗読するパフォーマンスを 20 から 30 個組み合わせることで、詩人を取り囲む環境と生きた時代の雰囲気を表現するという独特な手法をリュビーモフは用いていた。

このような演目の一つである、大祖国戦争に従軍した詩人を題材とした『倒れた人たちと生き残った人たち』(1965 年初演）では、幼さゆえにロマンチストな若い詩人たちが国に対する不信感を抱きながらもソヴィエトの勝利を信じる姿など、この時代を生きた人々の率直な感情を彼らの詩を通して表現した。詩を朗読するのは俳優たちが扮する「詩人」であるが、彼らは民衆と同じ感覚を持った人物として描かれ、劇中において時代の雰囲気を観客に伝える仲介者として位置づけられている。

一方で、マヤコフスキーを題材とした『聞いてくれ！』(1967 年初演）の「詩人」は単なる仲介者ではない。本作ではマヤコフスキーが革命に熱狂した時期から自殺に至るまでの心情と彼が生きた疾風怒濤の時代の雰囲気が表現された。「詩人」は時代の象徴である一方で、時代の大きな流れに強く抑圧される。政府とも民衆とも一致しえない立場として描かれた。リュビーモフは本作で社会と芸術家の関係という問題にも取り組んでいたと考えられる。

本発表では、『聞いてくれ！』における詩人に対する抑圧の描写を中心に作品分析を行い、劇中でリュビーモフが提示した社会と芸術家の関係を明らかにする。同時に『倒れた人たちと生き残った人たち』から詩人の役割がいかに変化したのか検討する。

（よこやま　あやか、東京外国語大学院生）

【C03】ロシア文学と新派映画--トルストイ『復活』の映画化を中心に

小川　佐和子

本報告は、大正期から昭和初期にかけての日本映画を対象に、ロシア文学の翻案の映画史的意義を検討する。

初期日本映画を形成する二大類型は、新派映画と旧劇映画であった。一般に新派映画とは、主に女性観客向けに製作された、前近代的な物語構造を持つ家庭小説の映画化を指す。ゆえに日本映画史の標準的価値観において「新派的なるもの」は、「お涙頂戴もの」として長らく揶揄の対象とされてきた。だがまさしくこの「お涙を頂戴する」情動性こそが新派映画を興行的に支えていたのである。近年の映画学や日本近代文学・演劇研究の領野では、情動的モードとしての「メロドラマ」の、日本におけるオルタナティヴな類型として新派が再考されている。女性を家父長制の犠牲者として描いた通俗悲劇でもある新派映画は、同時期の帝政ロシアにおけるメロドラマ映画とも共通項を有していた。

新派映画を再評価する一基軸として、新派映画の新劇化、すなわち西欧近代文芸の翻案という点に着目する。大正時代、日本映画の革新を推進していた日活向島撮影所では、ロシアの小説や戯曲をもとにシナリオが執筆され、映画が製作されることもあった。

日本映画史上に刻まれた代表的な翻案・翻訳物の新派映画は、レフ・トルストイの『復活』と『生ける屍』の映画化である。前者は『カチューシャ』という邦題で大正 3 年に、後者は大正 7 年に日活が映画化した。舞台や流行歌でも一世を風靡した『カチューシャ』人気にあやかって、映画界では主人公ネフリュードフが日本にまでやってくるという奇妙な続編・続々編も製作された。関東大震災を契機に新派映画が現代劇映画というメガジャンルへと吸収されて以後も、溝口健二監督・川口松太郎脚色の映画『愛怨峡』（昭和 12 年）として翻案はさらに続く。本作で山路ふみ子演じる日本化されたカチューシャは、吉本の女漫才師へと変貌し、薄幸の新派的ヒロインと自立するモダンガールの両方を体現した。

陸続する『復活』のアダプテーションは、ロシア文芸の新派様式へのローカライゼーションである。この実態を、映画台本、再録シナリオ、スティル写真、映画批評、観客の反応等から分析し、翻案の過程でいかに新派的想像力が発動しているかを明らかにする。

以上、ロシア文芸の新派化という現象を、新派的想像力という観点から考察し、越境性かつ諸芸術・娯楽ジャンルの文化的混淆性こそが新派の特性であることを結論付ける。

（おがわ　さわこ、北海道大学）

【C04】映画「惑星ソラリス」（1972）の「他者」とクリスの再生について

福間　加容

本報告は、アンドレイ・タルコフスキー(1932-1986)の「惑星ソラリス」（1972）の「他者」の問題と主人公クリスの再生について、作中に使われた美術作品を手がかりに考察するものである。

「惑星ソラリス」は、ポーランドの SF 小説家レムによる原作と違いが多く、ほぼ別物であり、結末はその最たるものだとされている。主な先行研究では、主人公クリスは、あたたかく真に懐かしい場所へ回帰していった、或いは、映画の結末は、人は過激なまでの他者性の中で真に懐かしいものを見出すというメタファーだと見なされている。一方、このラストシーンには、レンブラントの《放蕩息子の帰還》が借用されていることも指摘されてきた。故郷の家で慈愛溢れる父が放蕩息子をあたたかく出迎える図は、定説となった上記の結末の解釈を裏付けるものであった。しかし、クリス自身が「放蕩息子」だったことは、これまで見過ごされてきたと思われる。第一部では、クリスは人を人とも思わない振る舞いで、父を心配させている。第二部では、夢の中で、母から「何のためにわたしたちを困らせるの？・・・どこもかしこも汚れてるわ」、と言われている。クリスは周りの人を困らせ傷つける「放蕩息子」であった。クリスの頑なさは妻のハリーを自殺に至らせてしまう。しかし、クリスは「お客」のハリーに出会って良心の呵責に苦しみ、真に悔悟する。聖書の「放蕩息子」も、辛酸を舐めながら悔悟し、故郷の家に辿り着く話である（ルカ 15:11 – 32）。クリスが放蕩息子だったことを踏まえると、ラストシーンの《放蕩息子の帰還》の借用は、故郷のあたたかさというよりむしろ、主人公の真の悔悟を示すものだと思われる。クリスが再生することができたのは、ひとえに「他者」に対して一貫して人間的であり続けるという難しい試練を耐え抜き、真に悔悟し、「他者」を愛するに至ったからだった。

（ふくま　かよ、九州産業大学美術館）

【W01】ワークショップ　21 世紀のロシア・フォークロア

〔全体の趣旨〕

日本におけるロシア・フォークロアの研究は、文化人類学のように大々的にフィールドワークに赴くことが実質的にできず、文献研究による研究を行うのが主流であった。ソ連崩壊後、出版事情の多様化によりフォークロアの分野でも現地研究者の研究に触れることも容易になったが、実際のところは現実の変化の速度が急速すぎて、現地の研究のほうが追いついていないことも少なくない。

2017 年と 2019 年大会でのワークショップ「ロシア・フォークロアの現在」の延長企画である本企画は、その「現地が追いついていない」あるいは「現地が注意を払わない」研究を題材とし、従来の文献に加え、自身の調査資料、インターネット上で得られる最新情報を原典とし、外国人研究者の視点で、ロシア・フォークロアの現在的状況、特に文化の継承と再生産についての報告を行う。

また、モスクワのフォークロアセンター副所長の E.A.ドーロホヴァ氏をオンラインでパネリストとして迎え、パネリスト相互による質疑応答を経て、議論を行う。

使用言語は、報告については、日本側は日本語、ロシア側はロシア語で行い、質疑応答および議論については、ロシア語とする。

中堀正洋（創価大学）
熊野谷葉子（慶応大学）
柚木かおり（立命館大学）
Дорохова Екатерина Анатольевна (ГРДНТ им. В.П. Поленова)

〔全体の構成と各発表の要旨〕

1.「現代マースレニツァ祭の特徴と傾向――インターネット上の映像資料の分析を通じて」

中堀　正洋（創価大学）

本報告では、近年フォークロア関連行事を収めた動画や写真がインターネット上に多く投稿されていることに着目し、歳時儀礼のうち、復活祭前の大きな祭りとして日本でもロシア語学習者のあいだで比較的知られているマースレニツァを取り上げる。

ソ連崩壊後、ロシア各地では途絶えていた伝統文化を復活させる動きが出てきた。歳時儀礼のひとつであるマースレニツァも現代ロシアの春先の行事として盛んに行われ、その様子が近年にはインターネット上で多く投稿されている。こうした映像資料は、我々外国人にとっては文献だけでは理解しがたかった歳時儀礼のイメージを補う反面、多くの現代的な要素も含んでいるように思われる。報告者は、従来の民族学的記述を踏まえ、これら

の映像資料の分析を通じて、現代のマースレニツァ祭の地域の伝統との関連や目的の変容について検討し、その特徴と傾向の一端を明らかにしたい。

2.「チャストゥーシカの伝承と再生産に見るロシア・フォークロアの 21 世紀」

熊野谷　葉子（慶應義塾大学）

歌であれ語りであれ儀礼であれ、フォークロアの特徴は、その詩句・音楽・動作等に特定の著者が定められないこと、模倣と再現の連鎖によって伝承されること、そして連鎖の過程で改変が許容されることである。つまり、フォークロアの伝承の基礎には自由な模倣と作り変えがあると言える。一方、文字・音声・動画などに記録されたテキストの忠実で正確な暗唱は演奏者個人のパフォーマンスであり、未だフォークロアとはなっていない。

本報告では、20 世紀末から 21 世紀にかけて報告者が記録してきたチャストゥーシカ演奏の様子とそのテキストの構造について報告し、フォークロアの一ジャンルとしてのチャストゥーシカの伝承と再生産のしくみを確認する。その上で、コロナ禍中にインターネット上に現れたものをはじめ、近年行われたチャストゥーシカのパフォーマンスとテキストを紹介しつつ、現代のロシア・フォークロアを考える手がかりとしたい。

3.「現代の民俗バラライカの文化における伝統の継承者と規範」

柚木　かおり（立命館大学）

ロシアの代表的な国民的楽器であるバラライカの演奏文化には、19 世紀末にヨーロッパ風に近代化された芸術志向の文化と、国内の都市化の他には特に人為的な影響を受けていない農村の文化がある。本報告が対象とする後者の文化では、2000 年代中頃から、資本主義とインターネットという、社会主義時代には存在しなかった環境に適応したソ連時代末期生まれの愛好家たちが、「都市型の農村文化」を発展させてきている。その伝統文化の継承の新しい様式はこの 15 年ほどの間にさらに進化を遂げ、彼らはもはや従来の制度の中にあるいわば「正調伝統文化」の専門家としての研究者や活動家が無視できない存在となった。

本報告では、愛好家たち自身の SNS 発信と報告者が行った聞き取りをもとに、継承法と規範を分析し、「伝統文化の継承を第一義とするのではなく、自分たちが楽しむことによって、結果的に伝統文化が継承される」という現象を描出する。

4. “Обряды жизненного цикла в русских фольклорных традициях: современное состояние”

ДОРОХОВА Екатерина (ГРДНТ им. В.П. Поленова)

Глобальные изменения, произошедшие в русской традиционной культуре на рубеже XX и XXI столетий, затронули все её сферы, включая и обряды жизненного цикла. В качестве факторов, вызвавших трансформации традиционных форм, следует отметить как внутренние (укрепление позиций личностного начала в культуре, воздействие письменности и авторских текстов, уход из жизни старшего поколения носителей традиций), так и внешние, экстра-фольклорные: деятельность культурно-досуговых учреждений, развитие цифровых технологий, влияние фольклорного движения. Изменения происходят неравномерно в разных сферах жизненного цикла. Раньше всего и в наибольшей степени они затронули период раннего детства, утративший большинство практик, связанных с культурным строительством человека, а также комплекс детских и подростковых игр. Свадебный ритуал существенно изменил свою функциональность в связи с уходом из активного бытования практик и фольклорных текстов инициационного характера, связанных с изменением социального статуса молодожёнов. Наименьшее количество трансформаций коснулось предбрачного периода, сохраняющего значительное количество культурных текстов и их функциональность даже при существенном изменении темпоральных и локативных характеристик. Похоронно-поминальный обрядовый комплекс оказался наиболее устойчивым к внешним воздействиям и способным к продуцированию новых культурных текстов. В целом все изменения демонстрируют высокий адаптационный потенциал и жизнеспособность русской традиционной культуры оперативно отвечающей на постоянно усиливающееся внешнее воздействие среды.

【W02】ワークショップ　文学史から考えるウクライナとロシア

〔全体の趣旨〕

本企画の目的は、文学を通してウクライナとロシアの関係を再考することである。2022 年 2 月 24 日に始まった残酷な戦争によって、ロシア語・ロシア文学に関わる研究者もまた何らかのかたちでウクライナについて意識せざるをえなくなった。いままで自明のものであった境界が溶解する一方で、思わぬところに新たな断絶が生じた。それは地理的な境界線だけの現象ではなく、両国の範囲を超えて世界的な問題ともなっている。もちろん、ウクライナ文学を論じるのに、ロシアとの関係を常に考慮に入れる必然性はない。このような企画をロシア文学会で行うという身振りは、ウクライナ研究を領有しようとする無意識の欲望を解き放つ危険があるだろう。その危険性をも意識化することを含めて、文学におけるウクライナとロシアのもつれた関係に新しい視点をもたらしたい。ウクライナ文学、ロシア文学、および両方にまたがる領域を専門とする研究者によって議論を行い、両国の文化のどこに線を引くことができて、どこにできないのかを、現代から 19 世紀までの歴史的なパースペクティブを通じて、明らかにする。

司会：越野　剛（慶應義塾大学）
討論者 1：沼野　恭子（東京外国語大学）
討論者 2：安達　大輔（北海道大学）

〔全体の構成と各発表の要旨〕

1.　「なぜドンバスで SF 大会か？」
宮風　耕治（ロシア SF 研究）

2014 年のウクライナ政変とロシアによるクリミア併合を機に、ロシアの SF 界に大きな亀裂が生まれた。セルゲイ・ルキヤネンコやアンドレイ・ラザルチュークといった現代ロシアを代表する SF 作家がクリミアやドンバスを訪問した。中でも 2019 年に初めて開催された «Звезды над Донбассом»は、親露派武装勢力の後援を受け、各地から著名な SF 作家やファンを集める大規模なイベントとなった。多くの SF 作家が 2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻を支持し、侵攻に反対する作家たちを嘲弄している。1980 年代から続く SF の共同体が戦争を支持するに至る過程を、ドンバスのトポスに注目することで明らかにしたい。ウクライナにとどまり、侵攻に抗議する SF 作家たちの動向にも触れたい。

2.　「オレーナ・テリーハはいかにしてウクライナの詩人となったか」
原田　義也（明治大学）

帝政時代のロシア・モスクワ郊外に生を享けたオレーナ・テリーハ（1906-42）は、革命や戦争の荒波に揉まれる形でペテルブルク、キエフ、プラハ、ワルシャワ、クラクフなどを転々としたのち、ナチス・ドイツ占領下のキエフで「ウクライナの詩人」として非業の死を遂げた。その出自からすれば「ロシアの詩人」となっていたとしても不思議ではない彼女は、いかにして「ウクライナの詩人」となったのか。彼女にとって「言語」や「民族」とは何を意味したのか。また、戦時下という極限状況において、彼女は「詩」や「文学」にどのような役割を期待したのか。これらの問いへの答えを模索する作業を通して、「２・２４」以後の世界で両国の文学に触れる意義について考えてみたい。

3.　「タイトル：ミハイル・ブルガーコフの主要作品におけるキエフの表象」
大森　雅子（千葉大学）

キエフ出身のミハイル・ブルガーコフ(1891-1940)は、49 年の短い生涯のうち、28 年もの歳月をキエフで過ごした。1921 年にモスクワに上京後は、ロシア革命後の内戦での体験をもとにした長編小説『白衛軍』(1922-24)や短編小説『3 日の未明に』(1922)、『私は殺した』(1926)の他、世相戯評『キエフという町』(1923)を執筆した。本報告では、これらの作品と遺作『巨匠とマルガリータ』(1928-40)を取り上げ、ブルガーコフが師と仰いでいたニコライ・ゴーゴリ(1809-52)の「ウクライナもの」との比較分析も交えながら、彼が故郷のキエフをいかに描いたかという問題について考察する。

4.　「19 世紀前半におけるウクライナの民族アイデンティティ構築とその背景」
大野　斉子（宇都宮大学）

19 世紀前半に進んだウクライナの民族アイデンティティの形成過程を、1830 年代から 1840 年代を中心に複数の論点から整理する。当時におけるウクライナ出身の知識人たちは必ずしも統一的なウクライナ観を持たなかった。同時代に流行した思想や小ロシア地域とロシアとの関係をめぐる構想の多様性が背景とするものは何だったのか。ロシアへの同化を志向する保守派から分離独立を目指す急進派まで、ウクライナ出身の知識人が選択した立場を、想定されていた歴史観や将来像、思想的傾向などの観点から整理し、その後の時代につながる民族イメージの原点を考察する。

【W03】ワークショップ　安井亮平＝ボリス・エゴーロフ往復書簡（1974-2018 年）について

〔全体の趣旨〕

早稲田大学名誉教授・安井亮平（1935–2020）とロシアの文芸学者ボリス・エゴーロフ（1926–2020）との 44 年にわたる往復書簡 231 通を紹介し、併せて研究者の文書（アーカイブ）保存の問題を提起する。

4 本の報告後、フロアとの質疑応答を行う。

〔全体の構成と各発表の要旨〕

1.　「安井・エゴーロフ往復書簡翻刻・翻訳プロジェクトの成立背景」

長與　進（早稲田大学名誉教授）

故安井亮平は、長年「わがロシアの友人たち」と文通を行なっていた。その経緯について、氏はいくつかの書物で書き残しているが、文通の具体的な内容について、我々は知る機会がなかった。2020 年 10 月 3 日に氏が逝去されたあと、2021 年初夏に、ご自宅に保管されていたロシアからの書簡のコピーを受け取ることができた。総数は 324 通、差出人は В・Ф・エゴーロフ（73 通）、В・И・ベローフ（23 通）、В・В・コージノフ（25 通）、С・Г・ボチャローフ（18 通）をはじめ、20 人以上に及ぶ。

長年にわたるロシア知識人たちとの交流の記録として、公刊に値する資料であると判断し、もっとも数が多いエゴーロフ書簡の翻訳に着手することにした。2021 年 7 月に筆者と澤田和彦を編集委員として、「安井・エゴーロフ往復書簡翻刻・翻訳プロジェクト」を立ち上げ、元安井ゼミ生の塚本善也、長井淳、南平かおり、吉原深和子、吉見薫の協力を仰いで、書簡の翻刻・翻訳の作業に着手した。

2.　「エゴーロフ文書の相続人と保管責任者とのやり取り、ペテルブルグからの安井書簡の取り寄せ」

澤田　和彦（埼玉大学名誉教授）

両者の往復書簡の端緒は、1975～1983 年の安井の大学院での講義と深く関わっている。

エゴーロフ書簡の翻刻と翻訳に取りかかるに当たって、まずは米国在住の氏の令嬢から許可を得た。またサンクト・ペテルブルグ在住のエゴーロフ文書保管責任者 А・ドミートリエフ氏（ロシア文学研究所）と緊密に連絡を取り合った。氏は我々が翻刻した書簡のテキストを校訂し、注を大幅に増補してくれた。それによってロシアにおけるアカデミー版全集編纂の際の、注の付し方を学ぶことができた。また氏は、エゴーロフ存命中にロシア文学研究所手稿部に寄贈された安井書簡と、現在自分の手元に保管されているエゴーロフ夫妻の文書中に含まれていた安井書簡、併せて 85 通をスキャンして送ってくれた。さらに氏はペテルブルグのロシア国立図書館手稿部にも安井書簡 38 通が保管されていることを突きとめ、氏のサポートを得て、それらも取り寄せることができた。

3.　「安井・エゴーロフ書簡とその時代」

塚本　善也（中国文化大学）

安井・エゴーロフ書簡は 1974 年の初対面にはじまる。時代はブレジネフ政権末期、いわゆる「停滞期」だったが、他にコージノフ、ボチャローフら働き盛りの研究者たちとの出会いもこの頃で、それが安井に大きな刺激となったことはまちがいない。80 年代以降、氏が『朝日新聞』などで発信したジャーナリスティックな仕事は、そうした交流なくしてはなかったはずである。

もちろん、ブレジネフからアンドロポフ、チェルネンコ、そしてゴルバチョフの登場、高揚と失望のペレストロイカ、ソ連解体前後の混乱、エリツィンから今日のプーチン体制への変遷を置いては考えられない。

他方、エゴーロフの仕事ぶりは、一見そうした時代の流れに左右されず、最期までエネルギッシュに変わらなかったように見える。しかし、氏の書簡にも、まぎれもなく祖国ロシアの歴史は書き込まれていた。

本往復書簡はもとより私的なものである。しかし、そこには、確かに時代というものが読み取れる。本発表では書簡の時代背景に留意し、二人の交流を日露関係史の一つの記録として捉え紹介してみたい。

4.　「安井・エゴーロフ往復書簡で言及されている書籍・文献について」

吉見　薫（東京ロシア語学院）

安井・エゴーロフ往復書簡で言及されている書籍や文献は、両氏のその時々の研究テーマや関心の対象を示す貴重な資料である。書籍や文献についてのやり取りからは、たがいの国の文化や文学を理解し、広めていこうとする姿勢も窺える。具体的な文献名をあげながら、時系列に沿ってエピソードを紹介していく。

また、書籍・文献のみならず、往復書簡で触れられている絵画や建造物のアルバムも報告の対象とする。書簡から、二人は絵画や建造物などのアルバムを頻繁に送り合っていることがわかる。そのアルバムをきっかけに展開される芸術・文化にまつわる話題についても扱っていきたい。

資料を並べてみると浮かび上がってくるのは、両氏の篤実な人柄と学術研究への熱意である。本報告を通して、両氏の 40 年以上にわたる交流でのこまやかな心遣いを伝えることができればと思う。

日本ロシア文学会活動記録（2021～2022）

1.　2021 年度（第 71 回）大会

第 71 回定例総会・研究発表会（筑波大学・オンライン大会）は 2021 年 10 月 30 日（土）、10 月 31 日（日）の両日、Zoom によるオンライン方式で開催された。

これにともない理事会は 10 月 24 日（日）に、各種委員会は個別に開かれた。また日本ロシア文学会大賞は該当者がなかったため、授賞式・受賞記念講演ともに行われなかった。懇親会は開催されず、代替策として大会を通じて交流室（雑談・緊急退避スペース）が設けられた。

10 月 30 日（土）
　午前　開会式、研究発表会
　午後　研究発表会、定例総会
10 月 31 日（日）
　午前　研究発表会

2.　研究発表会内容

研究発表

第 1 会場

10 月 30 日（土）午前（ブロック①）
〔司会〕伊東一郎、番場俊
A01　大野斉子：タラス・シェフチェンコの作品におけるウクライナの農村の形象
A02　深瀧雄太：1880 年代のレスコフの創作における「クリスマス物語」シリーズについて

10 月 30 日（土）午前（ブロック③）
〔司会〕北井聡子、中野幸男
A03　安島里奈：ルサールカと愛―ジナイーダ・ギッピウスの作品におけるルサールカのモチーフ
A04　林由貴：メレシコフスキー『西の神秘：アトランティスからヨーロッパまで』に描かれるソドムとしてのヨーロッパ
A05　田村太：サヴィンコフ／ロープシン再考―『蒼ざめた馬』の二つの版を中心に

10 月 30 日（土）午後（ブロック⑤）
〔司会〕越野剛、八木君人
A06　小澤裕之：オベリウ派の相互関係について
A07　堤縁華：アクラム・アイリスリ『アヤメの生えていないところ』における名称と「誠実さ」の問題
A08　プロホロワ・マリア：リノール・ゴラーリク『呼吸できるすべてのものたち』における動物表象の機能

10 月 31 日（日）午前（ブロック⑨）
〔司会兼コメンテーター〕渡部直也
W01　柚木かおり、櫻間瑛、櫻間瑞希、是澤櫻子：民俗伝統文化の現在―ソ連崩壊 30 年を迎えて

第 2 会場

10 月 30 日（土）午前（ブロック②）
〔司会〕服部文昭、中澤英彦
B01　三谷惠子：旧約聖書『ヨブ記』と旧約偽典『ヨブの遺訓』－スラヴ語訳の比較研究
B02　池澤匠：ウクライナの言語イデオロギーにおけるウクライナ語・ロシア語・スルジクの表象を介した他者性の形成

10 月 30 日（土）午前（ブロック④）
〔司会〕上野理恵、河村彩
C01　井伊裕子：移動展覧会画家としてのシーシュキン―1870 年代の移動展覧会出品作を中心に
C02　赤渕里沙子：1920 年代ソ連における風刺と権力―A. ルナチャルスキーの取り組みを中心に
C03　大武由紀子：プロセスの画家 ソロモン・ニクリーチン（1898-1965）－社会主義リアリズムと多重リアリズム

10 月 30 日（土）午後（ブロック⑥）
〔司会〕野中進、山路明日太
A09　ユフノワ・イリーナ：Локус леса в прозе М.Ю. Лермонтова
A10　エゴロフ・アレクサンドル：Цветаева и Мережковский. К вопросу об источниках «Встречи с Пушкиным» (1913)
A11　レオノワ・マリアンナ：Нелинейная структура мотива шарманки в пьесе Андрея Платонова «Шарманка»

10 月 31 日（日）午前（ブロック⑦）
〔司会〕長谷川章、坂庭淳史
C04　岩本和久：タルコフスキーの映画における「無防備な身体」
C05　米山貴文：サンボに関する初の映画『無敵』と監督ユーリー・ボレツキーについて

10 月 31 日（日）午前（ブロック⑩）
〔コメンテーター〕齋藤陽一
W02　岩原宏子、鈴木正美：大井数雄の仕事―人形劇俳優、演出家、翻訳家としての活動。ソ連（ロシア）の人形劇との関係。日本における大井数雄研究―

第 3 会場

10 月 31 日（日）午前（ブロック⑧）
〔コーディネーター〕一柳富美子
W03　一柳富美子、山本明尚、野原泰子、石井優貴：ニューノーマル時代におけるロシア音楽研究の新たなモデル構築を目指して

3.　総会議事録要旨（＊詳細な総会報告は会報 51 号記載）

2021 年 10 月 30 日（土）16:45–18:15
Zoom によるオンライン

(1)　開会の辞　会長：三谷惠子（敬称略、以下同様）
(2)　学会賞表彰　　【論文部門】安野直
　　【著書部門】松下隆志
(3)　議長団選出：小俣智史（関東）・ペトリシェヴァニーナ（中部）・塚田力（関西）
(4)　事務局報告
(5)　各種委員会報告
(6)　支部会の今後について
(7)　2020/2021会計年度決算および会計監査報告
(8)　2021/2022 会計年度予算案
(9)　会員情報管理の外部委託の可否
(10)　学生会員制度について
(11)　規約のロシア語訳について
(12)　JCREES 幹事の選出方法について
(13)　全国大会の開催方法と来年 2022 年度の大会について
(14)　2021/2022 年度役員・理事・各種委員一覧
(15)　新型コロナウィルス感染拡大のために経済的被害を受けられた会員の方に対する会費免除について
(16)　会長選
(17)　議長団解任・閉会の辞　副会長：中村唯史

4. 会員異動（2021 年8 月～2022 年7 月）

ご逝去

坂中紀夫様（関西）、三谷惠子様（関東）、
望月恒子様（北海道）
ご冥福をお祈りいたします

退会　（以下、敬称略）

五十嵐陽介（関東）、川上洸（関東）、
武隈喜一（関東）、竹田親次（北海道）、
土居伸彰（関東）、冨田マルガリータ（関東）、
前田恵（関西）、山口涼子（関西）、
山田吉二郎（北海道）、支倉隆子（関東）、
（株）ユーラスツアーズ

入会

岩間成美（いわま・なるみ：関西）＜学生会員＞、
沖隼人（おき・はやと：関東）、
金丸駿（かねまる・しゅん：関東）、
小林淳子（こばやし・じゅんこ：関東）、
佐藤大雅（さとう・ひろまさ：関東）、
坪根岳（つぼね・がく：関西）＜学生会員＞、
濱田玲央（はまだ・れお：関東）、
三浦光彦（みうら・みつひこ：北海道）、
横山綾香（よこやま・あやか：関東）、
李博聞（り・はくぶん：関西）＜学生会員＞

賛助会費納入（2021 年9 月～2022 年8 月）

NHKエデュケーショナル語学部（6口）、
国際親善交流センター（JIC）（3口）、成文社、
日ソ、日本ロシア語情報図書館、白水社、
ロシア旅行社

維持会費納入（2021 年9 月～2022 年8 月）

岩浅武久、木村崇、国松夏紀、栗原成郎、
坂庭淳史（2口）、澤田和彦、中澤敦夫（2口）、
中村唯史（2口）、中村泰朗、野中進（2口）、
藤沼敦子、法橋和彦、三谷惠子（2口）、
望月哲男（10口）

日本ロシア文学会
2020/2021 会計年度決算報告(2020 年 9 月 1 日～2021 年 8 月 31 日)
2021/2022 会計年度予算案(2021 年 9 月 1 日～2022 年 8 月 31 日)
（2021 年 10 月 30 日総会承認）

Ⅰ　一般会計

収入の部	2020/21 年度予算	2020/21 年度決算	2021/22 年度予算	備考
前年度からの繰越金	¥5,649,122	￥5,649,122	￥7,612,245	
利息	5	13	15	
学会費	3,000,000	3,030,993	3,000,000	
入会金	5,000	3,000	10,000	
賛助会費	100,000	80,000	100,000	
雑収入	0	10,000	20,000	
特別収入	0	400,000	0	
合計	¥8,754,127	¥9,173,128	¥10,742,260	

支出の部	2020/21 年度予算	2020/21 年度決算	2021/22 年度予算	備考
大会準備費	¥400,000	¥0	¥0	筑波大学 オンライン大会
学会誌制作費	800,000	907,262	950,000	2019/2020 年度 予算と同額
交通費	800,000	26,000	500,000	対面理事会想定
事務委託料	280,000	260,440	550,000	システム移行 初期費用込
事務費	20,000	7,975	20,000	
広報委員会	16,000	15,714	16,000	
マプリャール会費	24,000	21,000	24,000	US$1=¥120 想定
JCREES 会費	30,000	30,000	30,000	
学会賞･大賞	40,000	68,180	50,000	学会賞 2 名、 大賞なし
通信費	10,000	7,994	10,000	
印刷費	0	186,318	200,000	大会資料集･ 会報印刷代
会合費	2,000	0	2,000	
事業費	50,000	30,000	50,000	
特別会計に振替	0	0	0	
（小計）	¥2,472,000	¥2,560,883	¥2,402,000	
予備費	6,282,127	0	8,340,260	
次年度への繰越金		¥7,612,245		
合計	¥8,754,127	¥9,173,128	¥10,742,260	

Ⅱ 特別会計

収入の部	2020/21 年度予算	2020/21 年度決算	2021/22 年度予算	備考
振替(一般会計)	¥0	¥0	¥0	
前年度からの繰越金	2,867,113	2,867,113	2,937,125	
維持会費	300,000	220,000	300,000	
利息	20	12	12	
合計	¥3,167,133	¥3,087,125	¥3,237,137	

支出の部	2020/21 年度予算	2020/21 年度決算	2021/22 年度予算	備考
事業費	¥150,000	¥150,000	¥250,000	国際交流・若手ワークショップ
学会参加者旅費補助	0	0	0	オンライン大会のため
小計	150,000	150,000	250,000	
予備費	3,017,133	0	2,987,137	
次年度への繰越金	0	2,937,125		
合計	¥3,167,133	¥3,087,125	¥3,237,137	

Ⅲ 基金（2020/21 会計年度決算報告）

1. 学会基金	2020/21 年度決算	備考
元本	¥2,527,729	
利息	214	
計	¥2,527,943	
2. 学会国際交流基金	**2019/20 年度決算**	**備考**
元本	¥1,071,000	
利息	0	10 年物で運用中
計	¥1,071,000	

（2021年監査報告　監事：諫早勇一（10月13日）、木村崇（10月15日）

委員会活動記録

■　日本ロシア文学会大賞選考委員会

野中　進

今年度の大賞選考の経緯については、2021 年 12 月末時点で 2 件の推薦があった。本年 3 月 5 日、オンラインで大賞選考委員会を開催し、審議の末、大賞候補者として井上幸義氏（上智大学名誉教授）を推挙することを決めた。委員会案は 7 月 17 日の理事会でも了承された。井上氏の功績等、詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』54 号をご覧ください。

■　学会賞選考委員会

八木　君人

学会賞選考委員会は 2021 年 12 月から 2022 年 6 月にかけて選考作業を行った。本年度は、web 会議システム（zoom）にて選考委員会を開催し、審議の結果、著書部門は古宮路子『オレーシャ『羨望』草稿研究―人物造形の軌跡』（成文社、2021 年 12 月）、論文部門は畔柳千明「聖典の正教化―『東教宗鑑』（1860）と清朝中国のキリスト教」（『ロシア語ロシア文学研究』第 53 号）に授賞することを決定した。選考過程、授賞理由などについて、詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』第 54 号を参照されたい。

■　学会誌編集委員会

坂庭　淳史

学会誌編集員会は 2021 年 10 月の全国大会後より新しい体制となった。新型コロナウイルス感染症の影響もあって対面での会議は開催されていないが、メール上で委員間の意見交換が活発に行われ、『ロシア語ロシア文学研究』54 号（22 年 10 月刊行予定）の編集作業はひとまず順調に進んでいる。なお、21 年 12 月には 53 号の論文と書評を J-STAGE（https://www.jstage.jst.go.jp/browse/yaar/list/-char/ja）で、22 年 4 月には 53 号全体を学会ホームページ上で公開した。54 号についても刊行後、同様のスケジュールでの公開を予定している。

この間、学会誌が多くの会員の力に支えられていることをあらためて認識した。ご協力いただいた方々には心から感謝している。また、新体制 1 年目でやや手探りで進んでいる部分もあり、ご迷惑をおかけした方々にはお詫び申し上げる。改善すべき点を精査し、それらを 55 号の編集作業に活かしていきたい。

■　広報委員会

本田　晃子

広報委員会では、引き続き学会ホームページおよび学会メーリングリストの管理・運営を行っています。ホームページについては、「学会からのお知らせ」、「学会関連その他の催し（カレンダー）」、「公募・外部イベント情報」、「ロシア関連一般書籍」等の項目を中心として、直近 1 年間で約 171 件の更新を行いました。メーリングリストによる学会からのお知らせについては、直近 1 年間で約 124 件の配信を行いました。また、旧式化していた学会ホームページのプラットフォームを、新たに WordPres とへ移行しました。新ホームページでは、オンライン上での学会費の支払いも可能になります（従来通り、郵便局での払込も可能です）。新ホームページについてのご意見・ご要望がありましたら、広報委員会までお知らせください。ご協力の程何卒よろしくお願い申し上げます。

■　国際交流委員会

武田　昭文

１．「国際学会等での報告に関する助成」と「公開研究会・（ミニ）シンポジウム等の実施に関する助成」の申請を、2022 年 5 月 31 日締切りとして募集しました。昨年度に続き、居住国内での国際学会・研究会への参加にも対象を広げての公募でしたが、新型コロナ感染拡大の影響、そしてロシア軍によるウクライナ侵攻の影響を受けて、残念ながら応募者はいませんでした。今後、状況が改善され、再び交流が活発になることを期待して、来年度も本制度への助成金として予算 15 万円が理事会にて承認されました。

２．「国際参加枠」による海外からの報告者について、今年度は募集段階でいくつか特例措置を取りました。ロシア軍によるウクライナ侵攻を受けて、参加費の支払いが困難なウクライナ国籍者および、国際送金が困難なロシア在住者に対して、特例措置として、参加費の免除を行うことにしました。また、2022 年度の本学会研究大会がオンサイトとオンライン併用での開催になったため、これらの参加者にはオンラインのみでの参加も認めることとしました。他の参加希望者は、昨年通り参加費 5000 円相当を paypal で徴収する条件とし、国際参加枠の申請を 6 月 30 日締切りとして募集しました。しかしながら、今年度の参加希望申し込みはありませんでした。

３．海外で開かれる国際学会・シンポジウム・セミナー等の情報について、国際交流委員会もしくは広報委員会までお知らせください。

■　社会連携委員会

鴻野　わか菜

社会連携委員会では、シンポジウム「日本におけるこれからのロシア語・文学・文化教育：多言語・多文化共生と教育のポリティクス」（2022 年 9 月 25 日、オンライン開催、日本ロシア文学会と日本ロシア語教育学会の共同主催）の企画・運営に参加した。また、JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール（2022 年 8 月 25 日-26 日　主催：JCREES、共催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）の企画選考に関わった。

■　倫理委員会

佐藤　千登勢

「日本ロシア文学会『倫理委員会』に関する内規」の最新改訂版（2018 年 10 月改訂）は、「日本ロシア文学会会員名簿【訂正版】2019 年 12 月」、および本学会ホームページに掲載されている。幸い、本年度も当委員会を発足させる事態は起こらなかった。

支部活動記録

■　北海道支部

2022 年 7 月 3 日（日）運営委員会・総会（Zoom によるリモート開催）

議題：1．2021 年度活動報告（理事会、および北海道支部），2．2021 年度会計報告，3．その他　新規運営委員の選出（小椋彩）

報告：1．運営委員の追加

支部長：大西郁夫
事務局担当：菅井健太
事務局住所：060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目　北海道大学文学部　菅井研究室気付
Tel: 011-706-3050　E-mail: ksugai@let.hokudai.ac.jp

■　東北支部

2022 年度は COVID-19 感染予防などの理由で研究会は行わないことになった。

また、関東支部との統合を踏まえて、支部長・事務局担当が 3 月 29 日に学会本部・関東支部執行部とミーティングを行い今後の方針を協議した。なお、この結果は支部会員内でのメール審議を経て了承された。

支部長：長谷川章
事務局担当：川辺博
住所：〒981-3213　仙台市泉区南中山 5-5-2
聖和学園短期大学　川辺研究室気付
電話　022-376-8270 (川辺直通)
ファクス　022-376-3155 (共用)
E-mail kawabe.hiroshi@seiwa.ac.jp
＊2022 年 10 月の総会で支部統合が承認されれば、上記の東北支部長、事務局担当のポストは廃止となる見込みである。

■　関東支部

1.『関東支部報』40 号発行（2022 年 5 月 22 日刊）
2. 2022 年度研究発表会・総会（2022 年 6 月 4 日（土）12 時 30 分より web 会議システム（zoom）によるオンライン開催）
◇研究発表会
・堤縁華（東大院）「ナショナリズム・故郷・誠実さ：アクラム・アイリスリの創作に見るソ連文学の遺産とポスト・ソ連のアゼルバイジャン」（司会：五月女颯）
・佐野晃（筑波大院）「ロシアにおける日本語学習動機の意識調査――テキストマイニングによる WEB コメントの定量分析――」（司会：佐山豪太）
・永田怜絵（東大院）「ドストエフスキーの作品へのアフェクト理論（情動論）の応用――『弱い心』、『ステパンチコヴォ村とその住人』を中心に――」（司会：番場俊）
・濱田玲央（東大院）「ガルシンの戦争作品群における人々の苦しみの研究」（司会：大山麻稀子）
・土田真紀子（東外大院博士前期課程修了）「映画におけるニコライ二世の表象とその社会的受容――アメリカとロシアの比較――」（司会：佐藤千登勢）
・沖隼斗（早大院）「詩人の再出立――ボリス・ポプラフスキイ「ヤルタからの出立」をめぐって」（司会：斉藤毅）
・金丸駿（早大院）「イーゴリ・ホーリンの初期バラック詩篇における語りの問題」（司会：鈴木正美）
・藍孟昱（創価大院）「ジラールの欲望の三角理論およびジジェクとクリステヴァの精神分析理論から見るロマン・ポランスキー作品の研究」（司会：貝澤哉）
・安野直（早大）「20 世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー」（司会：久野康彦）
◇総会
① 報告事項：2021 年度会計報告（2021.4.1-2022.3.29）、活動報告、2022 年 3 月 29 日に開催された「関東支部・東北支部　支部統合のための第 1 回ミーティング」での議論の報告
② 審議事項：東北支部との合同および事務局の選出方法に係る規約と現状との齟齬による、関東支部規約・規定の改訂／関東東北支部規約・規定の制定
3. 運営委員会（2022 年 3 月 30 日 web 会議システム（zoom）によるオンライン開催）
今期の支部運営体制や研究発表会について、「関東支部・東北支部　支部統合のための第 1 回ミーティング」での議論を踏まえた東北支部との合同について、支部規約・規定の改訂等について審議・検討した。
4. 今期の体制
支部長 沼野恭子
事務局長 八木君人
事務局住所 〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学学術院 八木君人研究室
（kanto.yaar@gmail.co.jp）

■　中部支部

6 月に支部統廃合に関する臨時総会を行った。

支部長：杉本一直
理事：中澤敦夫
事務局長：杉本一直
事務局住所：〒464-8671 名古屋市千種区桜 23 愛知淑徳大学　杉本研究室気付
(skazunao@asu.aasa.ac.jp)

■　関西支部

1. 2022 年度研究発表会・総会：2022 年 6 月 12 日（日）（Zoom 開催）
◇研究発表
岩間成美「ソログープ作品におけるディオニュソス論―『小悪魔』と『光と影』を中心に―」（司会： 高田映介）
平嶌寛大「18 世紀ロシア喜劇における P. N. デトゥーシュ―A. П. スマローコフと B. И. ルキンによる借用と翻案から―」（司会：清水俊行）
◇総会
①支部会の開催回数について　②会計年度の変更について　③決算案と予算案の承認　④会則の変更について　⑤選挙管理委員の承認　⑥監事の承認　⑦次回の支部研究会・総会について

２.『関西支部会報』(2022/2023 年度)の発行（2022 年 7 月 6 日）

支部長：金子百合子
事務局長：藤原潤子
住所：〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1 神戸市外国語大学 藤原潤子研究室 気付
E-mail：junko@inst.kobe-cufs.ac.jp

■　西日本支部

新型コロナウイルス感染症流行のため、2022 年度研究発表会・総会は延期となった。現在のところ 2022 年後半に開催する予定である。

支部長・事務局長：佐藤正則 事務局住所：〒819-0395 福岡市西区元岡 744 九州大学大学院言語文化研究院 佐藤正則研究室気付

日本ロシア文学会　第 72 回大会資料集
2022 年 9 月 22 日発行
発行者　日本ロシア文学会　中村唯史

〔書記〕
〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
安達大輔研究室内

〔庶務会計〕
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1
上智大学外国語学部ロシア語学科
秋山真一研究室内

E-mail（共通）: yaar@yaar.jpn.org
URL: http://yaar.jpn.org/

〔大会組織委員会〕前田和泉（委員長）、石川達夫、臼山利信、武田昭文、鳥山祐介、長谷川章

〔大会実行委員会〕石川達夫（委員長）、安達大輔、古宮路子、桜井厚二、高柳聡子、武田昭文、楯岡求美

〔大会実行協力者〕青山忠申、越野剛

ロシア文学の登場人物
18 世紀後半～19 世紀　百科辞典
Персонажи русской литературы.
Вторая половина XVIII-XIX в.
Энциклопедический словарь.М., ЦГИ.
T.1. 2022. 766 c.　¥18,040
T.2. 2022. 824 c.　¥20,460

わが国のコミックス 1911～2021 年
Наши комиксы. 1911-2021.
T.1-4. M., ТриМаг. 2021. 1248 c.　¥62,700
ロシア＆ソビエト児童雑誌 13 誌の頁から

ベロヴィンスキー
ロシア住民の生活　全3巻
Беловинский Л.В.
Жизнь русского обывателя. В 3 ч.
M., <Альма Матер>. 2022. 1382 c.　¥39,820
18～20 世紀初めの農村と都市の民衆の生活を描く

ロシア語辞典編纂百科事典　全2巻
Энциклопедия русской лексикографии. В 2 т.
СПб., РГПУ.　2021. 1320 c.　¥16,830

ロシア歴史文法　百科辞典
Историческая грамматика русского языка. Энциклопедический словарь
M., Азбуковник. 2020. 520 c.　¥7,590

コロナウイルス時代のロシア語
Русский язык. Коронавирусной эпохи.
СПб., ИЛИ РАН. 2021. 610 c.　¥6,930

日本の亜使徒聖ニコライ著作集　全10巻
Собрание трудов разноапостольного Николая Японского. В 10 т.
T.5　日記 1889-1895. 2021. 932 c.　¥12,540

ナウカ・ジャパン
店舗 11:00-19:00（日曜・祝日休み）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-34
TEL 03-3219-0155,　FAX 03-3219-0158
book@naukajapan.jp
https://www.naukajapan.jp

◆バベンコ：感情のアルファベット　喜怒哀楽の語彙の辞書＝シソーラス　Бабенко Л. - Алфавит эмоций: словарь-тезаурус эмотивной лексики. Екатеринбург : Кабинетный учёный, 2021. 432 стр. R3811 税込価格￥5,500

◆ロマーン・ヤコプソーン、クロード・レヴィ＝ストロース往復書簡集（1942-1982年）　Якобсон Р., Леви-Стросс К. - Переписка, 1942-1982. М. : Издательский дом Дело РАНХиГС, 2022. 424 стр. R6085 税込価格￥6,050

◆メレンチエヴァ、モルグノーヴァ：ロシア語の造語法　実習書 Мелентьева Т. И., Моргунова Е. В. - Русское словообразование: Практикум. М. : Русский язык. Курсы, 2022. 232 стр. R5262　税込価格￥3,630

◆ローギノヴァ：外国語としてのロシア語を教える教員のための音声学 Логинова И.М. - Фонетика преподавателю РКИ. СПб. : Златоуст, 2021. 160 стр. R3713 税込価格￥3,850

◆天秤座　月刊文学芸術誌（1904-1909)全4巻　第1巻第1冊・第2冊（1904-1905年）　Весы. Ежемесячник литературы и искусства. 1904-1909: В 4 т. Т. 1. Кн. 1 и 2. 1904-1905. М. : Азбуковник, 2021. R4044, R4045　税込価格各￥9,350

◆エドゥアルト・リモーノフ：アメリカの休暇　オートフィクション Лимонов Э. - Американские каникулы. М. : Альпина нон-фикшн, 2022. 392 стр. R6522　税込価格￥4,620 (※ほか、リモーノフ復刻単行書刊行中、既刊9タイトル)

◆ヴァカル：人びととモード　アヴァンギャルド史によせて　Вакар И. - Люди и измы. К истории авангарда. М. : Новое литературное обозрение, 2022. 480 стр. R5463　税込価格￥5,390

◆ヴァシーリエフ：無修正　ソヴィエトスタイル　写真集　Васильев А. А. - Без ретуши. Советский стиль. М. : Слово, 2022. 384 стр. R4136 税込価格￥12,980

◆ソビエト時代ヨールカ・オーナメント（1930-1970年代）カタログ　第1・2・3巻　Советские ёлочные украшения. Каталог. Т 1, 2, 3. М. : ИП Прибытков Д.В., 2021. R3770, R3771, R6307　税込価格各￥28,600

◆ゲオルギイ・ダネリヤ監督作品『私はモスクワを歩く』製作史　Я шагаю по Москве. Возвращение в утопию. СПб. : Подписные издания; Искусство кино, 2022. 388 стр. R5787　税込価格￥5,280

◆銀世紀キャバレー史　История кабаре Серебряного века. Сборник научных статей и публикаций. М. : ОГИ, 2021. 512 стр.　R5458　税込価格￥5,280

◆政治・思想誌「解放」復刻版（全3冊）1902-1905年　Освобождение. 1902, 1903, 1904-1905. М. : Модест Колеров, 2021. R3767, R3768, R3769　税込価格各￥7,700

◆スヴェトラーナ・フルツカヤ：ロシアに於ける日本人達　十七世紀末から二十世紀にかけて　Хруцкая С. - Японцы в России в конце XVII-начале XX века. М. : Международные отношения, 2022. 280 стр. R5836　税込価格￥4,180

日ソのホームページ（http://www.nisso.net）ではロシアの新刊書、新聞・雑誌、美術アルバムのコーナーの他に、約80,000点のロシアの書籍のキーワード検索が可能です

㈱日　ソ
東京・大阪・モスクワ

〒113-0033 東京都文京区本郷3-15-4本郷小林ビル
Tel.03-3811-6481　Fax03-3811-5160
E-Mail: nisso@nisso.net